病みつき六課

勠b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
病みつき六課

【Ｎコード】
Ｎ６９１２Ｗ

【作者名】
勠ｂ

【あらすじ】
病みつきシリーズまさかの連載！！？

これは、彼を巡る物語――――

自分の行動を邪魔されて、他人の行動を邪魔する――――

これは、そんな物語

『人間を愛することは必然だ』

プロローグな1日（早朝）（前書き）

病みつきシリーズ連載！！

※プロローグ書き直すかも

プロローグな1日（早朝）

俺の朝は早い

隊長補佐というポジションにいる俺はその名が示す道理隊長の補佐が仕事だ

この場合隊長というのは六課にいる隊長全てだ

――そんな俺の朝は早い

――――――

「遅いぞ！！」

まだＦＷの朝練が始まるより１時間ほど早い

そんな時間に俺は何をやるかと言うと、目の前にいるジャージ姿のシグナムさんと共にランニングだ

「すいません、シグナムさん」

俺はシグナムさんに頭を下げる

「次からは遅れないようにしろ」

「お前が遅れれば、それだけ私とお前が一緒に居る時間が減るの

だからな」
「私はお前と少しでも長く一緒に居たいんだ」
「――――誰よりもな」

シグナムさんは虚ろな瞳で俺に言う

「……すいませんでした」
シグナムさんと話していると後ろから声を掛けられる
「隊長補佐、シグナム副隊長おはようございます」
「おはようございます」

ティアナとスバルの2人が俺とシグナムさんに挨拶をする
「おはよう、2人共どうしたの？朝練にはまだ時間があるけど……」
シグナムさんは黙って2人を見ているため、俺が2人に聞く
「隊長補佐が毎朝走ってるって話を聞いたので、私達も着いていこうかなーって思ったんです」
スバルが元気よく応える
2人の服装はジャージなのはそういう意味か……

シグナムさんが2人の前に立つ
「お前達には朝練があるのだからランニングなど止めて、高町との朝練に備えたらどうだ？」
「ランニング後の朝練何て集中して出来ないだろうしな」
「朝練もランニングも両立出来るように頑張りすよ」
「それに、朝練前の軽い運動と思えばこれぐらい大丈夫ですしね」
シグナムさんの忠告をティアナが反論する
「なぁ、ティアナ」
俺が呼ぶとティアナが目線を此方に向ける
———ティアナもシグナムさん同様虚ろな瞳で俺を見る
「どうしたんですか、隊長補佐」
「そういえば、隊長補佐は私達のランニングの参加に賛成ですよね」
「隊長補佐が私のことを拒否するなんて———」
「隊長補佐は私と一緒に走ってくれますよね」
「大丈夫です、スバル程では無いですけど、六課に来てから体力には自信があります」
「隊長補佐の足を引っ張るようなことはしません」
ティアナが黙ると畳み掛けるようにスバルは言う
「そうですよ、隊長補佐」
「いきなり朝練やるよりも、隊長補佐と一緒にランニングしたあ

とのほうが私はいいです」
「隊長補佐は、私を入らないなんて言いませんよね――――」
そう言うとスバルも黙って俺の目を見る
――――スバルも虚ろな瞳だ
俺はシグナムさんの方を向く
「とりあえず、今日ぐらい、一緒に走らせても駄目ですか？」
「駄目だ」
シグナムさんは即答する
「さっきも言ったが、私はお前と少しでも長く一緒に居たいんだ」
シグナムさんが理由を聞くととティアナが言う
「それってただ、自分の立場を利用して隊長補佐を無理矢理自分の傍に居させてるだけじゃないですか」
「隊長補佐がどんなに嫌がっても、立場上隊長補佐はシグナムさんの言うことを聞くしかない」
「どんなに嫌でも、傍に居るしかない」
「それって、隊長補佐が可哀想だと思わないんですか？」
ティアナはシグナムさんを軽く睨みながら言う
「そんなことあるばずながないだろ」
「こいつは進んで私と毎朝ランニングしているんだからな」

「それに、こいつが私を嫌いなんて――――」

シグナムさんもティアナを睨み返す

「今日の昼は、時間が空いてますから、その時間に埋め合わせしますから」

そう言うと、シグナムさんは考える

といっても、直ぐに返事をする

「いいだろう、今日はお前に免じて特別にだ」

「「ありがとうございます」」

2人は息をそろえて返事をする

「それじゃ、行こっか」

俺はそういって軽く走りだす

――――これが、俺の朝だ

プロローグな1日（早朝）（後書き）

こんにちはー戮bでーす

病みつきシリーズ連載！！

というわけで、今回はまだプロローグその1です

皆さんどうでしたでしょうか

キャラの口調が変だと思った場合、報告してくれたら嬉しいです！！

PS感想書いてくれたり、お気に入り登録してくれたら嬉しいです！！

他の連載、短編の病みつきシリーズもよろしくお願いします！！

プロローグな1日（朝）（前書き）

ＰＶ７３００

総合評価２５０

お気に入り登録７０

それぞれ達成記念と言う名のプロローグその２です

※「があるのに最後に」がないのは仕様です

」が書かれるまでそのキャラのセリフが続くということになります

見にくかったり、前の方が言い方は教えてください

プロローグな1日（朝）

ランニングから帰ってきたあと

俺はシャワーを浴びて、制服に着替えると今日の仕事を確認するため、自室に向かった

俺の部屋の前には彼女———フェイトさんが居た

俺の部屋の前から動かずにずっと扉を見ている

俺はフェイトさんに近づき声を掛ける

「何か用ですか？フェイトさん」

フェイトさんは俺に気付くと、近づいてくる

「おはよう、今日はランニングの時間早かったんだね」

「はい、この間から急に早くなって……」

俺が応えるとフェイトさんは悔しそうな表情をする

「そっか……

「あなたも迷惑だよね

「朝から無理矢理走らされるなんて

「いくら隊長格の人はあなたに何でも我が儘言える権利があるって言っても

「それを朝練前の走りに付き合えなんて――――」
フェイトさんは虚ろな瞳で俺の目を見る
――――嬉しそうに笑いながら
――――俺を見る
「い…いえ、迷惑じゃないですよ
「シグナムさんも普段事務関係の仕事しかしない俺を気遣って誘ってくれたんでしょうから」
俺は苦笑いを浮かべながらフェイトさんに言う
「……そっか
「君は優しいし、嫌だなんて我が儘言えないよね」
――――でも
と、彼女は続ける
変わらず、俺の目を見ながら
――――俺に顔を近付けながら
「私には何を言っても良いんだよ
「あなたの我が儘を何でも聞いてあげる
「だって、私は――――」
「2人共何やってるんですか？」

フェイトさんと俺の鼻先が触れ合いそうになるぐらいに近くなった時

彼女―――キャロちゃんに後ろから声を掛けられる

「おはよう、キャロちゃん」

俺は彼女の方を向き、挨拶をする

「おはようございます、お兄ちゃん、フェイトさん」

キャロちゃんが言ったお兄ちゃんとは俺の事だ

……好きに呼んでいいと言ったらこうなった

「……おはよう、キャロ」

フェイトさんは不満そうに彼女に挨拶をする

「フェイトさんはお兄ちゃんに何をしようとしたんですか？

「お兄ちゃんが嫌がる事をしたら駄目なんですよ

「お兄ちゃんは私の―――　「私だけの―――」

キャロはそう言うと俺の横に立ち、俺の手を取る

―――虚ろな瞳で俺を見ながら

―――キャロは嬉しそうに笑う

それを見てフェイトさんは軽くキャロを睨む

「別に彼が嫌がる事なんてしてなかったよ

「彼も私も嫌な事じゃなかったよ
「むしろ、私達の邪魔をしてきたキャロの方が彼は嫌がってるんじゃないかな？」
フェイトさんの言葉を聞くと、キャロちゃんはフェイトさんを睨み返す

「そんなことないですよ
「お兄ちゃんはきっと嫌がってました
「お兄ちゃんは誰にでも優しいから何も言わなかっただけです
「そんなお兄ちゃんに無理矢理キスしようなんて――――
「お兄ちゃんが可哀想だと思わないんですか」

キャロちゃんの言葉にフェイトさんは更に強く睨む

「えーと、キャロちゃんは朝練はいいの？そろそろ始まる時間だけど」

俺が2人の間に立ち、キャロちゃんに聞く

「今日のお兄ちゃんの朝はなのはさんと一緒にFWの朝練を見ることに変わったことを伝えに来たんです」

「私もそれを伝えに来たの」

キャロちゃんは俺の質問に応えるとフェイトさんも応える

「わかった、それじゃ行こっか」

俺が言うとキャロちゃんは俺を引っ張るように来た道を戻る

「フェイトさんも、また後で」
俺が後ろを向き、フェイトさんに言う
すると、さっきまでキャロちゃんを睨んでいた表情とは一転して
嬉しそうに笑う
「……お兄ちゃん」
キャロちゃんは俺を見る
フェイトさんに向けた表情よりもましだが、俺を睨みながら
「キャロちゃんもありがとう、わざわざ伝えに来てくれて」
俺はキャロちゃんの頭を撫でながら言う
すると、彼女も満足そうな笑みを浮かべ、頬を紅くする

「お兄ちゃんのためなんだから、別にいいよ
「お兄ちゃんが私を誉めてくれるなら――
「お兄ちゃんが私の傍に居てくれるなら――
「お兄ちゃんが喜ぶなら――
「私は、何だってやるよ
「――お兄ちゃん」

キャロちゃんは俺の目を見ながら俺に言う
――変わらない瞳で俺を見ながら

俺の１日は始まったばかりだ

プロローグな1日（朝）（後書き）

こんにちはー戮bでーす

病みつき六課は他のよりも書きやすいです

……台詞だけだからかな

プロローグその1で既に沢山の方に評価してもらい嬉しいかぎりです！！

プロローグその1を投稿した後に、メッセージで各キャラのヤンデレになった理由を書いて欲しいとあったのでとりあえずプロローグが終わったら、好評価を記念してヤンデレになった理由を書くかも……

作者の気まぐれで変わりますけどね

書くとしても、書かないとしても、活動報告にてお知らせします

感想くれたら嬉しいです！！

ＰＳ活動報告にてフェイトの病みつきセイバー（仮）を書きましたので知ってる方は、見てくださると嬉しいです

病みつきシリーズのリクエストは何時でもウェルカムです

なのは以外でも知ってれば考えますし、知らなければ、調べた後で考えます

※活動報告にてツンデレ＋ヤンデレのセリフを書いてますが……

自信が無いのでコメントくれたら嬉しいです

プロローグな1日（訓練）（前書き）

総合評価４００達成！！

お気に入り登録１３０達成！！

ＰＶ１９０００達成！！

今回も短めです

プロローグな1日（訓練）

キャロに引っ張られるがまま俺が着いたのは六課の訓練場だ
今はＦＷ達の訓練を少し離れた場所でヴィータと見ている
「ヴィータは訓練に参加しなくていいの？」
俺の隣に立っているヴィータに話し掛ける
「まぁ、なのは１人で充分だろうしな」
今俺達がやっているのは動きのチェックだ
「それに、お前の隣にいたいしな
「朝会おうとしてもシグナムに邪魔されるし
「昼は隊長格の奴らが
「夜はなのはとフェイトが邪魔するしな
「たく、揃いも揃ってあたしの―――」
「ヴィータちゃんの何なのかな？」
ヴィータがいい終わるより先になのはさんが此方に近づきながら言う
「……ＦＷ達の訓練はいいのかよ」
「自主訓練させてるから大丈夫だよ」

軽く睨みながらヴィータが言い、ニコニコとした笑顔でなのはさんは応える

「それよりも早く教えてよ
「彼はヴィータちゃんの何なのかな？
「何――なのかな？」

――なのはさんは言う　そ――の目は笑ってなく
――静かにヴィータさんを睨みながら

「こいつはあたしの大事な人だ
「――あたしだけの
「――大事な」

ヴィータは俺の手を軽く握りながら言う

「そんなこと言わないでよ　「彼だって困っちゃうよ
「彼は私の大切な人なんだから
「ヴィータちゃんでも彼を困らせるようなことしたら――
「――許さないよ」

なのはさんは俺の手を取りながら言う

「何でこいつがなのはの大切な人になってるんだよ
「我が儘言ってるのは自分だろ
「こいつはなのはのこと嫌いかも知れないんだぞ
「それに――
「こいつが好きなのはあたしだ」

ヴィータは俺の手を握る力を強くし、なのはさんを更に強く睨む

「止めなよ、ヴィータちゃん
　「彼が好きなのはヴィータちゃんじゃないよ
「彼は誰に対しても優しいから、ヴィータちゃんは誤解してるだけ
「だって――
「彼が好きなのは――――」

なのはさんも負けずと俺の手を強く握り、ヴィータを睨み返す

「勘違いしてるのはなのはじゃないのか？
「こいつは優しいからな――
「あたし以外の奴に優しくする意味なんか無いのに
「なのはみたいに勘違いする奴が増えるだけだってのに」

「彼が優しくするべきなのは私だよ
「彼は私だけ見てればいい　「彼は私の傍に居るだけでいい
「彼は私のことだけ大切にしてればいい
「彼は――
「――私の」

――お互いに口を閉じる

――互いに互いを睨みながら

そんな2人は声を掛けられる

「何やってるんですか？」

声を掛けてきた彼女――ティアナは首を傾げながら言う
「……自主訓練は終わったのかな、ティアナ」
なのはさんはティアナの方を向くと言う
「はい、一通り終わりました
「それよりもなのはさん、隊長補佐の手を離してくれませんか
「隊長補佐に触れていいのは私だけなんですから」
ティアナはなのはさんを睨みながら言う
「何でお前だけがこいつに触れていいんだよ
「こいつはお前達じゃなくて私の――」
「2人共駄目だよ
「彼は私の大切な人なんだから
「私だけの――」
「違いますよ
「隊長補佐は私の傍に居てくれる人です
「ずっと私だけの――」
なのはさんとヴィータが俺の手を離すと、睨みつける
――自分以外の人を
――虚ろな瞳で
――睨み付ける
「ねぇ、2人とも、私とお話しようか」

そう言って歩きだすなのはさん

2人はなのはさんの後を追うように歩きだす

そんな3人の背中を見ながら

俺はため息をつく

――――今日の朝は、これで終わりだ

プロローグな1日（訓練）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

ヴィータの口調これであってるかな……

違和感があったかたは教えてくれたら嬉しいです

さて、前回の後書きに書いたヤンデレになる切っ掛けは

1なのは

2フェイト

3キャロ

4ティアナ

のどれかになります

それぞれのキャラ目線となります

どれが見たいか応えてくれたら嬉しいです！！

ＰＳ病みつき六課は文字数少ないのがデフォになるかも……

プロローグな1日（昼）（前書き）

総合評価５６０

文章、ストーリー評価１００

お気に入り登録１７０

ＰＶ３３０００

ユニーク９０００

達成記念！！

プロローグその４です

……関西弁難しかった

後書きの方にてちょっとした報告がございますので、よかったら見てください

プロローグな1日（昼）

ＦＷ達の朝練が終わり、昼飯を食べていると、彼女が俺に話し掛ける

「今日の昼は何か予定ある？」

彼女―――はやてさんは俺に聞いてくる

「すいません、今日の昼はちょっと……」

俺が言うと、はやてさんは俺を軽く睨んでくる

「ふーん、私の用事より大事な用事があるんか
「私は君の事が最優先なのに、君は違うんや
「私が君のことを大事にしても、君は私のことを大事にしてくれないんか」

はやてさんは続ける

「悲しいなぁ
「君が私を大事にしてくれないなんて
「やっぱり君は―――」

「どうかしましたか、我が主」

はやてさんが最後まで言うより先にシグナムさんが話し掛けてくる

「私の彼が我が主に迷惑でもかけましたか？」

「……なぁ、シグナム」

はやてさんは目線を俺からシグナムさんに移す

「何時から彼はシグナムのものになったん？

「彼は何時だって私のもののはずやけど」

「そんなことないですよ、我が主

「彼は何時だって私のものです

「何時も私のものです」

シグナムさんははやてさんに言う

———互いに変わらない

――――虚ろな瞳で

「……なぁ、シグナム
「彼は私の事を何時も考えてくれる
「私だけの事を考えていてくれてる
「そんな彼がシグナムのものなん？
「どう考えても、私のものと思わん？」

「思いません
「彼が考えてるのは私の事です
「我が主ではなく、私の事を何時も考えてくれる
「彼は私のものですから」

互いにそう言うと、互いに軽く睨み合う

「……まぁ、彼を困らせたくないし、今回は大人しく下がることにしよか」

そう言うと、はやてさんは俺に近づいてくる

「シグナムに迷惑掛けたらあかんよ」

それだけ言うと、はやてさんは来た道を戻る

「それでは、私達も行くとしよう」

俺は立ち上がると彼女に聞く

「昼の仕事は何ですか？」

「私と模擬戦だ」

……え？

「お前と模擬戦をやれる機会は滅多に無いからな

「それに、模擬戦だったら、高町やテスタロッサにも邪魔されないし

「何よりも、お前のことを最も近くで感じることができるしな」

それだけ言うと、彼女は歩きだす

そんな彼女に俺は着いていく

———最悪の昼になりそうだ

そんな予感を胸にしながら

———

「そんなことがあったの」

目の前の彼女———シャマルさんは俺の手当てをしながら言う

「君は戦闘するタイプの人じゃないのに、無茶して戦うから」

……今の俺はボロボロだ

「やっぱり君もお姉さんと一緒に医者をやったほうがよかったんじゃない？」

……よかったかも

「今からでも遅くないよ
「はやてちゃんにお願いして私と2人で六課の医者をやろ」

「いや、遠慮しときます」

俺が断るとシャマルさんの手が止まる

「なんで断るの？
「お姉さんと一緒に居ようよ
「私と一緒に居るの嫌？
「私よりシグナムの方がいいの？」

「愚問だな」

シャマルさんの問いかけに彼女が応える

「……あら、シグナムお仕事はどうしたの」

「こいつが心配になってな、一区切りついたから様子を見に来たんだ」

それだけ言うと、座っている俺の手を引っ張り無理矢理立たせる

「彼は怪我人なんだからもう少し丁寧に扱ったらどうかしら
「シグナムはそんなに彼のこてが嫌いなの？」

「私がこいつを嫌うはずがないだろ」

シグナムさんは俺の手を引っ張り部屋から出る

「まだまだ仕事は残ってるんだ
「お前は私の傍にいるだけでいい
「仕事が終わるまで私の横にいろ」

俺の目を見ずに要件だけ言うシグナムさん

「――――わかりました」

俺はそんな彼女に返事をする

――――もうすぐ1日が終わる

プロローグな1日（昼）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

プロローグは次回で終わります

プロローグが終わった後の話なんですが

……リクエストが欲しいです

言い訳をするとしたら、私の方もネタはあるのですが、少ない

何よりも少ない

というわけで、リクエストなどくれたら嬉しいです

○○と○○が主人公と○○をする話

みたいな感じでくれたら嬉しいです

キャラは４人までにしてくれたらなお嬉しいです

……さっきから嬉しいですばかり言ってる気がする

ＰＳめだかボックス連載予告投稿しました
　めだかボックスを知っている方は見てくれたら嬉しいです！！

病みつきシリーズ最新話も投稿しました

プロローグな1日（夜）（前書き）

今回は今までに比べるとヤンデレ要素少なめな気がします

……ヤンデレ要素メインなのに

今回は『！』等を半角から全角にしました

読みにくいと思ったり、このままでいいと思ったりしたらコメントくれたら嬉しいです！！

プロローグな1日（夜）

仕事が終わったため部屋に帰ろうとした俺に彼女は声を掛ける。

「お仕事お疲れ様」

彼女―――高町なのはは笑顔で言う。

「なのはさんもお疲れ様でした」

俺が言うと彼女は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「……今日もですか？」

恐る恐る俺が聞くとなのはさんは首を縦に振る

「ほら、早く行こうよ、フェイトちゃんとヴィヴィオが待ってるから」

そう言うとなのはさんは俺の手を取り歩きだす。

……今日も、か

俺はばれないようにため息をつきながらなのはさんに着いていった

――――――

「お兄ちゃーーーん！！」
なのはさんの部屋に入ってすぐにヴィヴィオちゃんが俺に抱きついてくる。

「こんばんは、ヴィヴィオちゃん」

俺の右足に抱きついている彼女の頭を撫でながら言うと、もう1人の彼女も此方に来る。

「今日も来てくれたんだ」
嬉しそうな笑みを浮かべながら彼女――――フェイトさんは言う。

俺は最近なのはさんの部屋に誘われるようになった。
俺としては構わないのだが、女3人に男1人というのは気まずい。

「はい、お邪魔でしたか？」

「全然邪魔なんかじゃないよ
「むしろ、あなたに会えて私は嬉しいよ」

「ヴィヴィオも！！」

「私も嬉しいよ」

フェイトさんの言葉にヴィヴィオとなのはさんという順で続く。

「紅茶淹れてくるね」

そういうとフェイトさんはキッチンに向かう。

「私達も行こっか」

なのはさんは俺の手を掴んだまま歩きだす。

ヴィヴィオはなのはさんが掴んでない方の手を取る。

……今日はまだまだ疲れそうだ

そんな事を考えながら彼女達に着いていった。

俺は今ソファーに腰掛けている。

右側にはなのはさんが肩と肩が触れ合いそうになるぐらい近くに座っていて、ヴィヴィオは俺の膝の上に座っている。

「ねぇ、ヴィヴィオ
「彼の膝の上から退いてあげなよ
「彼だって迷惑だと思ってるよ」

なのはさんがヴィヴィオに言う。

「そんなことないよ
「お兄ちゃんは私のこと大好きだもん
「だから、お兄ちゃんはヴィヴィオのこと迷惑だなんて思ってない
「私のことだーい好きなお兄ちゃんはそんなこと考えたりしない」

ヴィヴィオは顔を上げ。俺を見ながら言う。

———俺の目を真っ直ぐ見ながら

そんなヴィヴィオになのはさんは言い返す。

「いーいヴィヴィオ
「彼が好きなのは私なんだもん
「彼はヴィヴィオのこと好きなのかもしれないけどそれは子供としてなんだよ　「だから、我が儘ばかり言ったら駄目だよ」

「何を言ってるかな、なのは」

なのはさんに言い返したのはヴィヴィオちゃんではない。

「何って、彼は私のこと好きって言ってるんだよフェイトちゃん」

俺達の後ろからトレイを持っているフェイトさんが言う。

「彼が好きなのは本当になのはなのかな？

「私は違うと思うな」

そういうとフェイトさんはテーブルの上にカップを置くと俺の隣に座る。

なのはさんと変わらないぐらい近くに座るとなのはさんは言う。

「だったら、フェイトちゃんは彼が一番好きな人は誰かわかるの？」

フェイトさんを軽く睨みながらなのはさんは言う。

「……なのはじゃないよ」

そんななのはさんに睨み返しながらフェイトさんは言う。

「だって彼が好きな人は私だもん
「彼は私のものなんだよ　「だから、私は彼のことは何でもわかるの
「――なのはと違ってね」

「お兄ちゃんが大好きなのはヴィヴィオだよ
「お兄ちゃんは何時もヴィヴィオのこと思ってくれてるもん
「ヴィヴィオもお兄ちゃんのこと何時も思ってるよ　「――大好きなお兄ちゃんのこと」

「彼が好きなのは私だよ　「フェイトちゃんやヴィヴィオじゃない
「彼のことを一番考えてるのも私だし
「彼が何時も考えてるのは私のこと
「だって、私は彼の大切な人たもん
「――誰にも渡さない　「――誰にも渡したくない」

3人がそう言うと、それぞれの相手を睨む。

――光が無い虚ろな瞳で
――はっきりと睨む

俺はそんな気まずい空気の中紅茶を飲む。

――今日ももう終わりか

そんなことを思いながら。

――これが俺の『当たり前の1日』

――彼女達が『病みつき』になった俺の1日

――そんな1日も、これで終わりだ。

プロローグな1日（夜）（後書き）

こんにちはー勁bでーす

今回は本来ならまだ続く予定でしたがプロローグで書くネタではないと思ったためここまでです

……ヤンデレ要素少ない気がする

さて、前回の後書きにリクエストを書いたのですが、それに応えてくれた方に聞きたいことがあります

そのリクエストを書いて投稿するときに名前を出してよろしいでしょうか？

私が書くまでにコメントをもらえなかった場合はメッセージを送り、それでも無かった場合は名前は出さないようにします

応えてくれたら嬉しいです！！

リクエストの方も募集中ですので、気軽にコメント下さい！！

※シチュエーションだけでも有り難いです！！

ＰＳ活動報告にて

『病みつきなのは～裏話～（仮）～』

『病みつきキャロ（仮）』

を書きました

連載として

『めだかボックス～何でも知ってた少年～』

を投稿しました

どれも興味がある方は見てくれたら幸いです！！

病みつきキャロにはちょっとした質問もありますので応えてくれたら嬉しいです！！

私が彼に病みつきになった理由～なのは編～（前書き）

プロローグ終わって早々の番外編その１！！

ＰＶ７００００達成！！

総合評価６６０達成！！

お気に入り登録２００達成記念！！

評価やお気に入り登録してくれた皆様には本当に感謝です！！

私が彼に病みつきになった理由～なのは編～

私の中の彼は特別な存在だ。

誰よりも愛しくて

何よりも大切で

何時までも傍にいたい

そう思うぐらい私は彼が大好きだ。

私が彼のことを好きになった理由は単純な出来事だった。

――――単純な出来事だ。

機動六課設立前にフェイトちゃんから紹介してもらったのが彼だ。

フェイトちゃんが機動六課に誘ったらしい。

もちろん、この時の私は彼のことを好きになるなんて思ってもいなかった。

彼のポジションは隊長補佐という変わったものだ。

フェイトちゃんとはやてちゃんが考えたと彼は言っていた。

そんな彼の仕事は隊長や副隊長のサポートだ。

もちろん隊長の中には私も入っていて――――

「ごめんね、手伝って貰っちゃって」

「別に良いですよ、俺は隊長のサポートが仕事ですから」

彼は笑みを浮かべながら言う。

彼には事務の仕事を手伝ってもらっている。

彼に仕事を手伝ってもらうのはこれが初めてだ。

自分の仕事を彼にやらせているようで余りいい気分じゃないけど……

その時の私は彼とは余り話したことがなかった。
彼はよくフェイトちゃんやはやてちゃんと一緒に居ることが多かったからだ。
お互いに黙って仕事をする。
気まずい空気の中何時間か経つと彼は私に言う。
「後は、俺1人で出来るので高町隊長は休んでてください」
私が何か言うよりも先に彼は続ける。
「今日だって朝からFW達の訓練だったんでしょうしね、何時も働いている高町隊長にはゆっくり休んで貰いたいですから」
笑みを浮かべながら彼は言うと私を見ずに仕事を続ける。
「でも――――」
「俺のことなら大丈夫ですよ、これが俺の仕事ですから」

彼は私に優しく言う。

「じゃあ、君の言うとおり後は任せようかな」

「はい、任されました」

彼の気遣いを無駄にしたくなかったし、その日は疲れてたから私は彼に残りの仕事を任せた。

「それと、私のことはなのはで良いよ」

「わかりましたなのは隊長」

彼は私の顔を一瞬見ると返事をする。

———今思えばその時から私は彼が好きだったのかもしれない。

優しい彼のことが好きだったのかもしれない。

少なくともその時の私は彼のことを『優しい人』とは思っていた。

私のことを気遣ってくれた優しい人だと。

そして、この思いに気付いたのはヴィヴィオと出会って数日後だ。

その頃には彼のまわりにはティアナやスバルがいて、たまにキャロやエリオが居るぐらいだった。

彼はヴィヴィオが六課に馴染むまではとヴィヴィオの傍にいた。

ヴィヴィオが私とフェイトちゃん以外に懐いたのが彼だったからだ。

私がヴィヴィオと遊ぶ時も大抵彼が居た。

優しい笑みを浮かべながら彼はヴィヴィオの傍にいた。

私に向けた優しい笑みを他人に向けていた。

———凄く嫌だった。

胸が苦しくなるとかじゃなくて不快感しかなかった。

――彼が私以外の人と話すのを見る。

関係ない

――彼が私以外の人を見る。

関係ないはずなのに

――彼が私以外の人と仲良くしているのを見る。

関係ないなんて嫌だ

私は彼の傍にいたい。

優しい彼の傍にいたい。

優しい彼ならきっと何時でも私を見てくれる。

優しい彼ならきっといい子じゃなくても私を見てくれる。

優しい彼ならきっと――

何時からか私は彼を部屋に誘うようになった。

ルームメートのフェイトちゃんやヴィヴィオも喜んで彼を歓迎し

てくれた。

日に日に彼のことが更に好きになる。

彼の傍にいなくても彼の事を考えるだけで更に好きになる。

――優しい彼は私以外にも優しい

――嫌だ

――彼に優しくされていいのは私だけ

私だけがいい！！

こんな我が儘も彼なら聞いてくれるはず。

優しい彼なら聞いてくれるはず。

――でも

私は言わない。

彼が困ることはしたくないから。

そう思っても、最近私の恋路を邪魔する人達が多い。

彼は誰にでも優しいからしょうがない。

誰にでも優しい彼

私にも優しい彼
私以外にも優しい彼
好きだよ
――どんな君でも大好きだよ
――どんな君でも愛してるよ
――でも
邪魔な人達はいらない。
私と彼だけ居ればいい。
彼の傍には私しかいらない！！
私以外は必要ない！！
――だから
私は今日も彼を誘う。
今はまだ2人っきりにはなれないけど――
――私は彼と部屋へと向かう。
――邪魔な人なんか

――――消えればいいのに

私が彼に病みつきになった理由～なのは編～（後書き）

こんにちはー勁ｂでーす

知ってるか？
原作なら皆仲が良いんだぜ。

……どうしてこうなった！？

まぁ、今更ですね。

今回もヤンデレかどうかと言われたら微妙な感じですね。

番外編ですし良いよね？

ＰＳ活動報告にて

病みつきマテリアル

病みつきアリサ（仮）

病みつきｖｉｖｉｄその１

病みつきステラ（仮）（ガンダム）

病みつき真耶（仮）（ＩＳ）

病みつきアインハルト（仮）

病みつきセイバー（仮）（ＦＡＴＥ）

を

短編にて

ペルソナ３／もう１人のワイルドタイプ

魔法少女リリカルなのは～息抜きというなの予告風短編～

を投稿しました！！

病みつきｖｉｖｉｄは短編にするか活動報告で書いておわりにするか悩んでます。

皆さんの意見が聞きたいです！！

どれも感想くれたら嬉しいです！！

病みつき六課も感想＆ａｍｐ；リクエスト募集中！！

次回は早速リクエストを使わせてもらいます！！

お世話をする1日（早朝）（前書き）

ＰＶ８００００達成しました！！

沢山の方に見てもらえてうれしいです！！

今回の話をリクエストしてくださった『妄想劇場』さんには感謝です！！

お世話をする1日（早朝）

俺のベッドに彼女は横になっている。

ピンク色の子供っぽいぶかぶかなパジャマを着ており、顔を赤くしながら俺を見ている。

俺はそんな彼女のサイズにあうぐらいの大きさになるまでたたんだ濡れたタオルを額に置く。

「気持ち良いです～」

彼女――――リインフォース？は言う。

俺がリインさんを看病してるのには理由がある。

――――理由がある

――――――

何時も道理シグナムさんとのランニングのために早く起き、ジャージに着替えて部屋を出ると俺の部屋の前で倒れていたリインさんと目が合った。

……えっ？

俺が驚きの余り声すら出さずにリインさんを見ていると彼女は言

う。

「助けてください～」

今にも消えそうなぐらい小さな声を聞くと、とりあえず彼女を抱えて俺の部屋に迎えると、ベッドの上に寝かせた。

それが今日の始まりだ。

――――――

（というわけで、今日のランニングには参加できません）

俺が念話でシグナムさんに伝える。

（そんなのシャマルにでも任せればいいだろ

（貴様は私と共に居るべきだ

（それに、何故我が主ではなく貴様の所に出向いたのだ）

シグナムさんは念話越しでもわかるぐらい怒っている。

（この埋め合わせは何時かするんで、今日は休みにしてくれませんか？）

シャマルさんに見せるのもはじめは考えてたがリインンさんは俺に看病してほしいと言ってるため付き合うしかない。

（むぅ……埋め合わせか）

シグナムさんが少し黙ると直ぐに言う。

（明後日の夜は空けておけ）

それだけ言うとシグナムさんとの念話が切れる。

「どうだったですか？」

リインさんが俺に言う。

「今日は休みにしてもらいました」

「よかったですっ！」

笑顔でリインさんは言うと続ける。

「君の今日の仕事は全てキャンセルしてリインの看病をしてください！

「はやてちゃんには私が言っときますね

「君は1日中私の傍にいてくださいよ！！」

リインさんに俺は言い返す。

「流石に全部キャンセルは……」

「何でですか？」

リインさんは言う

――――俺の目を見ながら
――――はっきりと

「リイン以上に大切なことあるんですか？
「君はリインのことを最優先してくれないんですか？
「リインは君のことが最優先ですよ
「はやてちゃんも大事ですけど――――
「それ以上に君が大事です！
「リインは君のことが好きですから
「君はリインのこと嫌いなんですが？
「リインはこんなにも好きなのに――――
「嫌いなんですが？」

リインさんが口を閉じると俺の目をじっと見る。

「えーと、1日中は無理だと思いますけど、昼までなら傍にいます
「それでは駄目でしょうか？」

俺がリインさんに妥協してもらうよう頼んでみる。

「……今日1日はここにいてもいいですか？」

リインさんは風邪で赤かった顔を更に赤くしながら言う。

「大丈夫ですよ」

俺が言うとリインさんは笑みを浮かべる。

「えへへ、それならリイン我慢します！！」

嬉しそうに笑いながらリインさんは言う。

「早速はやてちゃんに報告しますね！」

……俺も報告しとくか。

俺は彼女に念話を送る。

（少しいいですか？フェイトさん）

俺の今日の朝は彼女――――フェイトさんの仕事の手伝いだ。

（どうかした？）

送って直ぐに返事が帰ってくる。

（朝の仕事なんですけど……）

（今日は私の手伝いだよ）

（実は――――）

俺はフェイトさんにリインさんのことを伝える。

（――――ですので、朝の仕事を休ませて欲しいんですけど……）

（駄目だよ）

短くフェイトさんが返事をすると、続ける。

（リインも大事だとは思うよ
（立派な六課の仲間だもん
（でも、何であなたがリインの看病をするの？
（普通はシャマルがするんじゃないかな
（あなたはリインをシャマルに預けて私の仕事を手伝うべきだよ
（――傍にいて）

フェイトさんからの念話が止まる。

俺の返事待ちなんだろう。

（リインさんは俺に見てもらいたいって言ってますし、病人の我が儘ぐらいは聞いてあげたいじゃないですか）

この場合リインさんを人扱いするかどうかは割合だ。

（――病人の我が儘ぐらい
（そうだよね、あなたが優しいのは今に始まったことじゃないもんね
（そんな優しいあなたが私は好きだよ
（何かあったら連絡してね、あなたの我が儘だったら私は何でも聞くから）

それだけ言われるとフェイトさんとの念話が切れた。

「はやてちゃんも今日はゆっくり休んでいいって言ってくれましたよ～」

「それは良かったですね」

俺が彼女――――リインさんを看病する1日が始まった。

お世話をする1日（早朝）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

病みつき六課は大体こんなふうに1日の早朝から始まり朝→昼→夜と進んでいく形式にしました。

今回はプロローグに出なかったリインフォース？の登場です。

本当はプロローグではやてと共に登場させる予定でしたがキャラの口調がわからなかったため出番カットしてました。

そんなリインフォース？の話のリクエストしてくださった『妄想劇場』さんには感謝です！！

とりあえず当分の間はプロローグに出てなかったキャラ（後はギンガさんとナンバーズ位ですが）を出す予定です。

それでは、次回の後書きど会いましょう！！

ＰＳリクエスト募集中です！！

六課では使えないと思ったりしたら短編の方で使わせてもらいます！！

お世話をする1日（朝）（前書き）

後書きにゲスト登場！！

今回から書き方を修正しました

『――――』を基本的に地の文では『――――』セリフでは『――』と数を偶数に変えました。

お世話をする1日（朝）

リインさんの看病を初めて何時間かたったところで、俺は今日、何も口にしていないことに気付いた。

「リインさん、朝食は食べましたか？」

「食欲ないてすぅ」

力なく言うリインさん。

「何か食べないと駄目ですよ

「お粥でも作ってくるんで、待っててくださいね」

そう言って俺は部屋から出て食堂に向かった。

――――――

この時間なら食堂には人はいない。

俺はそう思っていたんだが――――

そんな俺の予想を覆すように彼女が食堂にいて――――

彼女は何かを作っていて――――

「おはよう」

彼女――――はやてさんは俺の気配に気付いたのか、こちらを向き首を傾げながら言う。

「おはようございます、はやてさん

「朝食を作ってるんですか？」

六課の食堂は時間限定でフリーになっており、今はその時間でもある。

……まぁ、利用する人は殆どいないんだけど

「私は食べたんやけど、リインが食べてないかと思ってな

「せっかくだし、お粥でも作ろうかと思ったんや

「君はどうしたん？」

はやてさんはリインさんのことを心配してるらしい。

……家族を心配しない人なんかいないか

「俺も同じです

「リインさんの朝食を作るついでに自分の分も作ろうかと思ってたぐらいですね」

「だったら、君の分も私が作ろうか」

はやてさんが笑みを浮かべながら俺に言う。

「そんな、悪いですよ」

「1人分作るのも2人分作るのも変わらんよ
「それにな、君のために私が作りたいと思ってるんや
「――君のためだけに」

はやてさんが俺を見つめる。

――――濁った瞳で

――――俺を見据える

……断るわけにもいかないか

「お願いします」

俺が言うとはやてさんは嬉しそうに笑いながら俺の分を追加で作りはじめた。

――――――

はやてさんが料理を作り終わり、リインさんの様子を見たいと言ったため一緒に俺の部屋へと向かった。

「ごめんな、リインも私も君に我が儘ばかり言って」

「大丈夫ですよ

「それに、朝の仕事を休ませてほしいって我が儘を聞いてくれた

じゃないですか」

「ふーん、そうなんだ」

俺の言葉に返事をしたのははやてさんではなく――――

「あなたが私以外の人に我が儘言うなんて――

「ショックだなー」

俺が振り返ると、彼女――――フェイトさんは言った。

「フェイトちゃん、仕事はどうしたの？」

はやてさんが一歩前に出てフェイトさんに言う。

「少し休憩してるの

「休憩がてら、彼の様子でも見ようと思ってね

「そしたら、食堂で2人が話してるのを見つけてね、そのまま跡を追ってたの」

フェイトさんがゆっくりと近づいてくる。

「あかんで、フェイトちゃん

「そんなストーカーみたいなこと――

「彼だって嫌がるんちゃうかなぁ？」

「彼が嫌がるはずない！！」

フェイトさんは叩きつけるように叫ぶ。

「はやてに彼の何がわかるの！！
「彼からすれば私と居られる時間を潰されたんだから、そっちのほうが嫌がってるよ！！」

「フェイトちゃんこそ彼の何を知ってるん？
「彼は病人のリインの看病をしたいがためにフェイトちゃんとの仕事を休んだんやで？
「フェイトちゃんよりもリインのことが彼は大事にしてるんだよ」

はやてさんの言葉を聞くと、フェイトさんははやてさんを一瞬睨むと背を向け、そのまま歩きだした。

「ほら、早く行かないとお粥が冷めちゃうし行こか」
はやてさんは何事も無かったかのように俺の部屋に向かって歩きだした。

……フェイトさんには後で何か言っておこう

そんなことを考えながら俺も自分の部屋に向かって歩きだすため後ろを向く。

すると、はやてさんの顔が真前にあった。

驚きの余り何も出来ずに見ていたら、はやてさんが口を開く。

「今、フェイトちゃんのこと考えてたやろ
「私と二人でいるのに何で他人のこと考えてるん？
「私と2人でいるときぐらいは私のことだけ考えてよ
「何時も大目にみてるんだから――」

それだけ言うとはやてさんは背を向け、今度こそ俺の部屋に向かって歩きだした。

俺はそんなはやてさんについていくように歩きだす。

……何で考えてたことわかったんだろ

――――――

「美味しかったですぅ」

俺の部屋につきリインさんと共にはやてさんが作ってくれた朝食を食べ終えた。

途中リインさんが『口移ししてくれなきゃ食べません！』等言っていたが、はやてさんが何とかしてくれたためその話は割合しよう。

リインさんはベッドの上で横になっていて、俺とはやてさんはソファーに座っている。

「ごちそうさま、美味しかったです」

「ふふっ、お粗末さま」

はやてさんは嬉しそうに笑いながら俺とリインさんを見る。

「どうかしたんですか、はやてちゃん」
リインさんがはやてさんに言う。
「いやな、こうやってるとまるで家族みたいやなーって思ってな」
「家族ですか？」
俺が首を傾げながら言う。
「せや、君がお父さんで私がお母さんそしてリインが子供や」
俺が父親……
それも、はやてさんみたいな美人と
「いっそのこと、本当に結婚する？」
はやてさんは楽しそうな笑みを浮かべながら俺に言う。
「そ、そんな！？　俺みたいな奴がはやてさんみたいな美人の方と結婚なんて……」
自分でもわかるぐらい顔を赤くしながら言うとはやてさんは立ち上がる。
「冗談や」
それだけ言うと俺の部屋から出ていく。
扉が閉まる前にはやてさんはこちらを向くと言う。

「私は告白するよりもされたいしな」

それだけ言うと扉が閉まる。

……え？

「はやてちゃん大胆ですね～」

リインさんが黙っていた俺の代わりに言う。

「リインも告白するよりもされたいですぅ」

楽しそうに笑いながらリインさんは言う。

――――はやてさんの問題（？）発言を最後に

――――俺の朝は終わった

お世話をする1日（朝）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

隊長補佐「こんにちは、名前が無くて作者から書きにくいと言われている隊長補佐です」

書きにくいんだよ

隊長補佐「名前を考えればいいだろ」

何時かな

今回はゲストが来てます！！

隊長補佐「元神魔王シリーズを書いてる『パワード・マウンテン』さんのオリキャラ、ミヤさんです！！」

ミヤ「こんにちは、ミヤです！！」

隊長補佐「よろしく、ミヤさん」

ミヤ「よろしく！！」

いきなりテンション高いね、何か良いことでもあったのかい？

ミヤ「良いこと？」

隊長補佐「こいつの言ってることは無視していいですよ」

ひどっ！？

ミヤ「良いことっていうか、プレゼントを持ってきたんだ！！」

隊長補佐「お、パワードさんから？」

ミヤ「いや、勠bから」

隊長補佐「もしもし、フェイトさん？ゴミを消してほしいんだけど――」

ちょ！　おま！！

やりかねないから！！　ここだったらやりかねないから！！！

ミヤ「……俺もこいつのせいで“ヤ“られてるんだよな」

“月刊恋愛の友“に出させていただいたんだよね。

隊長補佐「『リック・ブラッディ』としてだな。　こいつの恋愛小説が世に広まったら……男逃げて！！超逃げて！！！」

ミヤ「……大変なんだな」

大変ですとも

そろそろプレゼントあけようか。

ミヤ「オッケ～」

ガサッ↑プレゼントをあける音

ドンッ！↑中から重いものが落ちる音

サッ↑隊長補佐が落ちたものを確認する音

ガッ！↑逃げようとする隊長補佐をミヤさんが捕まえる音

何で逃げるんだよ。

隊長補佐「それ見たら誰でも逃げるわぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ミヤ「すごく……大きいです」

おい、止めろ！！

今回のプレゼント（？）は最近病みつき六課の感想で話題？になっている『五寸釘』です。

隊長補佐「な、何する気だ！！」

さっきお前はフェイトさんを呼んだろ。

隊長補佐「腹いせか！！？」

ミヤ「あ、来たぜ」

隊長補佐「止めてくれ！！お願いだからフェイトさんに渡さないで！！」

？？「プレゼントありがとうなの」

ミヤ「フェイトとは言ってない」

隊長補佐「その人はもっと駄目ぇぇぇぇぇぇ！！！」

それでは、今回はこの辺りで

ミヤさん、最後に一言！！

ミヤ「元神魔王シリーズよろしく！！」

隊長補佐「止めて！！襲うなんて馬鹿な考えしないで！！」

病みつきシリーズもよろしく

隊長補佐「いやだ！！オソワレタクナイ！！！」

それでは、ミヤさんは俺と共に『転成者殺し』の後書きに行きましょうか。

ミヤ「オッケー」

ＰＳ１え？　隊長補佐襲われるの？

と思った方は今日明日中に投稿する予定の病みつきティアナ投稿

後に書く活動報告に期待？

ＰＳ２『この作品のこのキャラを後書きに出させてやってもいいよ』と言ってくださる方大募集！！！

原作キャラ以外なら大歓迎です！！

それと、プレゼント等くれたら嬉しいです。

後書きに書かせてもらいます。

ミヤ「プレゼントは頼むものじゃないだろ」

お世話をする1日（夜）（前書き）

ＰＶ１２８０００突破！！

たくさんの方に見てもらえて嬉しいです！

お世話をする1日（夜）

はやてさんが作ってくれたお粥を食べた後、リインさんは眠ってしまった。

一緒に寝ようと誘われたが丁寧に断っておいた。

そんなリインさんを部屋に残して、俺は昼から仕事を再開

今日はなのはさんが俺を部屋に誘わなかったため帰宅した。

「お帰りなさいです～」

部屋に入るとリインさんは力なく俺に言う。

「ただいま、リインさん」

俺はソファーに腰掛けるとリインさんに尋ねる。

「体調はどうですか？」

すると、リインさんは嬉しそうな笑みを浮かべながら言う。

「君のおかげで大分良くなりましたよぅ

「本当にありがとうですぅ」

「別にこれぐらいなら構いませんよ」

……明後日の夜に用事が入ってしまったが

まぁ、リインさんが元気になってくれる代償と考えれば安いものだ。

俺が明後日の夜何があるか心配しているとリインさんは口を開く。

「リイン、お風呂に入りたいですぅ」

風邪を引いてる人をお風呂に入らせるのは……

いや、別にいいんだっけ？

俺がそんなことを考えているとリインさんは自慢げに言う。

「風邪を引いててもお風呂に入っていいって昔シャマルが言ってましたぁ」

まぁ、シャマルさんが言うなれば別にいいんだろうな。

「ですから、一緒に入りたいですぅ！」

顔を赤くしながら元気良く言いだすリインさん。

……えっ？

俺が言ってることを理解しようとする前にリインさんは続ける。

「リインも恥ずかしいですけど、1人じゃ入れないですしぃ……」

……まぁ、そうだな

でも、どうしようか……

この時間にはまだ人がいるため女であるリインさんとお風呂に入るわけには……

「リインの我が儘聞いてくれませんかぁ？」

リインさんは悲しそうな顔をする。

我が儘……

そうだ！　こういう時は！！

俺は早速彼女に念話を送る。

（フェイトさん、今時間ありますか？）

念話を送ってすぐにフェイトさんから返事がくる。

（どうかしたの？
（あなたから頼みごとなんて珍しいね
（何でも言ってよ
（他の人達と違って私はあなたの言うことを何でも聞くよ）

フェイトさんは嬉しそうに言う。

（だったら――）

まずは、部屋に来てもらうとしよう。

――――――

「リインのお風呂に付き合う？」

部屋に来てもらったフェイトさんには早速事情を説明した。

フェイトさんは首を傾げながらリインさんに言う。

「何でリインは彼と一緒にお風呂に入りたいなんて言ったの？」

「お風呂に入りたいならはやてとかに頼めば良いんじゃないかな」

フェイトさんがリインさんを軽く睨みながら言う。

言われているリインさんは俯いたまま何も言わない。

一応だが、リインさんはフェイトさんとお風呂に入ることに納得してもらっている。

「それじゃ、フェイトさん後は……」

「うん、私に任せて」

そう言うとフェイトさんは顔を近付けてくる。

「今回は私に頼ってくれたし大目に見て上げるよ

「でも、次私以外の人の我が儘聞いたら駄目だよ
「今のリインは病人だからまだいいけど
「それ以外の人は――」
フェイトさんは顔を離すとリインさんを大事そうに胸に抱える。
「それじゃ、行こっか」
「わかりました～」
リインさんとフェイトさんは部屋から出ていく。
……さてと
俺は今日、最後になるであろう1人の時間を大切にすることにした。

――――――
時間を見計らって俺は風呂場へと向かった。
少し行くと何か話しているフェイトさんとリインさんを見かける。
「フェイトさん」
俺が2人に近付きながら声を掛ける。

すると、気づいたのか、フェイトさんはリインさんを抱えながら俺に近づいてくる。

「リインさんは俺が預かりますよ」

そう言ってフェイトさんからリインさんを受け取る。

「わざわざありがとうございました」

俺がフェイトさんに頭を下げる。

すると、そんな俺の頭をフェイトさんが撫でだした。

「お礼なんか言わなくても良いよ

「私とあなたの仲だもん、今さらこんなことでお礼なんて――

「でも、お返しがしたいっていうんなら今日一緒に入れなかった分今度一緒にいたいな

「――2人っきりでね」

フェイトさんがそう怪しげな笑みを浮かべながら言うと、俺の頭から手を離して、歩きだす。

「私はもう帰るね

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

軽く手を振るフェイトさんに返事をして俺も部屋に戻るために歩きだす。

「もう少し強くし抱き寄せてくださいぃ」
すると、さっきまで黙っていたリインさんが急に口を開く。
「病人なんですから馬鹿なこと言わないでください」
俺はリインさんの言うとを軽く流しながら部屋へと向かった。

――――――

俺の目の前でリインさんが幸せそうに笑う。
部屋に帰り、早速寝ることにしたのまではよかった。
本当だったら俺はソファーで寝るつもりだったのだが、リインさんが一緒に寝たいと騒ぎだしたため寝ることにしたのだ。
「えへへ
「幸せです～」
顔を赤くしながらリインさんは言う。
「君と一緒にいられて今日は幸せだったですよ～
「……このままずっと2人でいたいですけど
「何で皆リイン達の邪魔をするんですかねぇ？」

リインさんは続ける。

「リインは、はやてちゃんと君とリインの3人で幸せになりたいだけ――

「それだけ――」

リインさんが俺の左手を繋ぐ。

「えへへー

「暖かくて、心地よいですぅ

「このまま寝ちゃいそうです～」

……寝ないのか？

そんな心配もあったが、それからすぐにリインさんは寝た。

――――幸せそうな寝顔だ

俺はリインさんのそんな横顔を見ながら思う。

――――彼女を看病する1日はこれでお終いだな。

そのまま俺は、意識を手放した。

お世話をする1日（夜）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

今回もゲストを出させていただく予定でしたが、止めました。

ゲストを出す許可をくださった方本当にごめんなさい！！

次回には出したいと思います！

さて、今回ゲストを出さなかった理由は次回に関するアンケートを取りたいからです。

アンケートにご協力ください！！

1、お世話をする1日（後日談）

ショートストーリー形式で看病する1日に関わったキャラの後日談を書きます

2、次に進む

話としては、シグナムとの話かギンガとの話かのどちらかになります。

感想くれたら嬉しいです！！

PS病みつきティアナと病みつきティアナ～裏話～投稿しました！！

私が彼に病みつきになった理由～フェイト編～（前書き）

お世話をする1日が終了したため番外編です！！

私が彼に病みつきになった理由～フェイト編～

私が管理局に入隊してすぐのこと。

その日のことはまるで昨日の事のように思い出せる。

私が彼を一方的に好きになった日。

――――あの日のことを

その時の私はまだ子供で、所属していた部隊で休憩中は甘やかされることが多かった。

私は晩ご飯を食べるため食堂にいた。

空いていたためてきとうに選んで座ろうとした私に声を掛ける人達がいた。

「フェイトちゃん、ここ座りなよ」

その人が指差した席に私は座る。

テーブルにはつの席があり、指差した人の隣に私は座っており、指差した人の対面にも他の人が座っていた。

ついでに、全員女性で大人だ。

「フェイトちゃんは夢とかある？」

「夢ですか？」

首を傾げながら私は聞き返す。

「そう、夢よ」

「フェイトちゃん位の年頃だと色々あるでしょ？」

……夢

その頃の私にはそんなもの無かった。

いや、あったはあったけど、どれも夢と言うほど立派なものじゃないのだ。

「あーぁ、もしかして、無い？」

俯いて黙っていた私を気遣うように言う。

「皆さんの夢って何ですか？」

何か参考になるかもしれない。

私が言うと2人共苦笑いを浮かべながら言う。

「私は結婚かな」

「私も

「早く結婚して幸せな生活したい」

……結婚かぁ

私には特別好きな異性がいない。

――――その時はだけど

「あなたは何かないの？」

隣にいた女性が私の逆方向を見て言う。

「……何がですか」

私が声をした人を見る。

間に女性がいたこともあり見にくかったが、なんとか見れた。

――――その人が彼だ

その時の私は彼のことを自分より年下の仲間でしか思ってなかったが、実際これは凄いことだ。

私位の年でも珍しいのにそれより下がいる。

彼も私のように可愛がられていたが、それは始めだけだった。

当時の彼は今と違って無愛想だったからだ。

「夢よ、あなたも夢とかないの？」

興味津々に聞く女性に彼は指を顎にあて、考える素振りをしながら応える。

「……水族館」

「「はぁ？」」

私以外の２人が声をそろえて言った。

私は首を傾げながら彼の夢を聞く。

「家族と水族館に行きたいです」

彼の夢を聞き軽く笑いながら２人は立ち上がる。

そのうち１人が彼の頭を撫でながら言う。

「かなうといいわね」

彼の頭から手を離すと２人はそのまま食堂を出ていった。

「……かなうはずが無い」

ぽつりと呟くように彼は言う。

……家族と仲悪いのかな？

私は席を隣に移動して彼の隣（隣といっても通路ごしだけど）に

座る。

「どうかしましたか？」

私が彼を黙って見ていると無表情で彼は言う。

「ふぇ！？

「えぇーと……」

私が慌てて次の言葉を考える。

「ど、動物園は行ったことあるの！？」

……何聞いてるんだろ

彼は無表情で応える。

「1人でなら」

1人？

動物園って皆で行くものじゃないのかな？

「誰かと行ったことないの？」

「……行く人が居なかったんです」

彼は俯きながら言う。

「でも……家族とか」

「母さんは俺が生まれて直ぐに他界して、父さんは俺を施設に預けてどこかに行きました」

……あっ

「ごめんね、嫌なこと聞いて」

「大丈夫です

「もう、何年も前ですから」

彼は平気そうに言う。

普通なら気分を悪くしてもいいのに、何もなかったかのように振る舞う。

「施設を出て直ぐに管理局に入隊して、時間が出来たから行ったんです」

……彼の年齢で管理局にいるのは珍しい。

「誰かといこうにも、部隊の人を誘うわけにも行かないし……」

もし、私がなのは達に出会わずに管理局に入隊したらこうなってたかもしれない。

「施設の人達を誘うことも出来ませんしね

「だから、1人で行ったんです

「動物園には人が沢山いて驚きましたよ

「……皆、楽しそうでした」

彼は珍しく無表情ではなく口元に笑みを浮かべながら言う。

「……なんで、水族館は家族と行きたいの？」

私は彼の気持ちを考えずに聞く。

「……動物園では親子であろう人達が多かったからですね

「だから、俺も家族と行けば楽しいのかなって思ったんです」

彼の言い方からして詰まらなかったんだろう。

……私はどうだろう。

もし、私がなのは達に出会わずに管理局に入隊してたら――――

私はどうなってたんだろう。

――――彼と同じだったのかもしれない

――――誰にも愛されず、無愛想に振る舞い

――――無表情で目の前の仕事をやるだけ

――――楽しいだろうか？

そんなはずない。

楽しいはずが無い！！

「ねぇ――」

私が言うと彼は私を見つめる。

――――何も見てなさそうな瞳で

――――目と目が合ってるのに、まるで見られている気がしない

――――昔の私に似ている眼

「今度、私と水族館に行こ」

彼は私の言葉を聞いて驚きながら言う。

「俺は家族と行きたいだけですから――」

「だったら」

彼が言い終わる前に被せて言う。

「だったら、私があなたの未来のお嫁さんになってあげる」

自分でも驚くほど冷静に言った。

彼は一瞬驚くと直ぐに笑みを浮かべながら立ち上がる。

「大人になって、ハラオウンさんが良ければ」

私は彼の手を取る。

――――今の私は驚くほど冷静だ

「――フェイト」

――――冷静なんだ

「フェイトって呼んで――」

――――だから

「私は未来のお嫁さんなんだから」

――――私は本気だ

――――

あれから直ぐに彼が部隊から離れた。

もちろん、私は彼が離れることを聞いて悲しかったし、涙を流した。

彼に会えなくなるからじゃなく、『彼を忘れるかもしれない』ことと『彼が私を忘れるかもしれない』ことに――――

でも、その心配は気鬱だった。

彼が部隊から離れて、私は彼のことを忘れるどころか更に強く思

うようになったのだ。

――――離れ離れになってから数年後

私はまた彼と同じ部隊になった。

――――なるようにした。

その時の彼は今程ではないが元気で、社交性があった。

そんな彼を見て私は苛立ちを覚えた。

私以外の人が彼を変えたんだ。

――――私の彼を

――――勝手に

まぁ、私はどんな彼でも愛してるし、愛すけど。

彼が約束を覚えているかどうかはわからない。

でも、何時か一緒に行くんだ。

――――2人っきりで水族館に

――――私達家族で

そのためなら私は何だってする。

どんな犠牲だってかまわない。

――――私に夢を与えてくれた彼のためなら

私が彼に病みつきになった理由～フェイト編～（後書き）

こんにちはー勠bでーす

隊長補佐「こんにちは、補佐です」

今回はお世話をする1日が終わった記念の番外編です。

「リインさんの看病疲れた……」

ほら、紅茶でも飲んで休んでろ。

「おっ、気が利くな」

今回の『紅茶』は『ケフィア』さんからプレゼントしてもらいました。

「ケフィアさんありがとうございます」

さて、今回の病みつき理由はどうでしたでしょうか？

設定的にはフェイトが一番早く隊長補佐と出会ってます。

「俺の設定がついたな」

家族がいないだろ。

これは今後生かしてくんだが……

「だが？」

こんな設定いらなかったって声があれば書き直す気でいます。

「……俺の設定変わる可能性あるのか」

そういえば、紅茶美味しい？

「……？　美味しいぞ」

それはよかった。

今回『も』紅茶は彼女に淹れてもらったんだ。

「も……？」

愛情たっぷりだとよ。

「……なんか嫌な気がしてきた」

ＰＳ短篇に病みつきシリーズ（仮）纏め～オマケもあるよ～

連載に病みつきなのはシリーズ

を投稿しました。

紅茶ネタが気になる方は病みつきなのはシリーズの更新を期待してください！！

外出する1日（早朝）（前書き）

ヤンデレ要素が無しに等しい今話です。

……何時もヤンデレ要素無い気がする。

外出する1日（早朝）

もはや日課になりつつある早朝のランニング。

待ち合わせ場所に行くと珍しくシグナムさんがいなかった。

……今日は無しかな？

そんなことを考えていたら、後ろから声を掛けられた。

「今日は早いのだな」

声がしたほうを向くと、そこには何時もどおりジャージを着たシグナムさんがいた。

「珍しいですね、シグナムさんが俺より遅いなんて」

何時もは俺よりもずっと早いのに。

前に一度、何時もより30分ほど早く起きたため待ち合わせ場所に来たら既にシグナムさんがいたと時があった。

そんなシグナムさんが遅刻するのは本当に珍しいことだ。

「少し寝付けなくてな」

恥ずかしそうにシグナムさんが言う。

寝つけない？

何かあったのか？

「ほら、喋ってる暇があったら走るぞ」

そう言って走りだしたシグナムさんの隣で俺も走る。

「……今日の夜は空けてあるだろうな」

……リインさんの看病から2日後、それが今日だ。

俺は今日、彼女に会うために六課を離れるため、シグナムさんに今日の予定を聞くためにランニングに参加したのだ。

「……今日の夜は何をするんですか？」

恐る恐る俺が聞くとシグナムさんは目を逸らしながら言う。

「デ、ディナーだ」

「ディナー？」

まさか、シグナムさんからディナーの誘いを受けるなんて……夢にも思わなかった。

シグナムさんのことだから、『一晩中訓練に付き合え』とか『どちらかが倒れるまで実践練習だ』とか言われるのかと思っていた。

「デートスポットとして有名な処があると話を聞いてな

「是非とも、貴様と行ってみたいと思ったのだ

「……嫌か？」

俯きながら自身なさげに言うシグナムさんに俺は慌てて言う。

「そんなことないですよ！

「楽しみにしてます！！」

シグナムさんはそれを聞き安心したのか口元にうっすらと笑みを浮かべた。

「楽しみにしておくといい

「貴様が私を惚れ直すような夜にしてやろう」

自信満々に言うシグナムさん。

――――シグナムさんはやっぱり、こういう表情が似合う。

彼女の横顔を見ながらそんなことを考える。

「楽しみにしてます」

素直に思った一言を言って、俺はランニングを続けた。

――――――

ランニングから帰ってくるとシグナムさんが俺に向かってビンを

投げる。

「これでも飲むといい」

渡されたのは少しだけシグナムさんが飲んだ後の栄養ドリンクだ。

「ありがとうございます」

最近、ランニングが終わったら今のようにシグナムさんが少し飲んだ栄養ドリンクをくれるようになった。

貰う立場でもあるため強くは言えないが、飲みかけじゃないほうが嬉しい。

……まぁ、これはこれでいいけど。

そんなことを考えながら栄養ドリンクを飲む。

この栄養ドリンクは少し変わった味がする。

自分で買ってきたのとは少し違う味――――

……苦いというか鉄の味というか

「これから貴様は出かけるんだったな」

栄養ドリンクを飲み終わったと同時にシグナムさんは言う。

「はい

「夕方には帰ってくるのでディナーには間に合うと思います」

シグナムさんは俺に近づく。

「貴様は今から私以外の女に会いにいくんだよな

「私としてはそんなこと貴様じゃなくてもいいと思うのだが、向こうから指名されたのならしかたがないな」

俺の目の前で止まると、　冷たく睨みながらシグナムさんは続ける。

「無いとは思うが言っておこう

「私以外の女に現つを抜かしたら――

「何であろうと切る」

冷たく言い放つシグナムさんを見る。

……本気なんだろう。

その表情や言葉にうそ偽りが感じられない。

「それだけは心得ておけよ」

シグナムさんは俺に背を向けて歩きだした。

……切られないように気を付けよう。

そう思いながら俺も自室に向かった。

外出する1日（早朝）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

隊長補佐「こんにちは」

本編で出てきた『栄養ドリンク』は名前こそ伏せましたが『八ヶ岳さん』からのプレゼントです！！

隊長補佐「鉄の味がしたぞ……」

鉄の味といえばあの“調味料“しかないだろ。

シグナムさんには『オル＝トロス・クラフトさん』からプレゼントしてもらった『サプリメント（鉄分）』を送っておこう。

少量とはいえ、“調味料“を使ったんだし。

隊長補佐「調味料って、栄養ドリンクになに入れたんだよ」

病みつき理由シグナム編でわかるよ。

そろそろ書くつもりだし。

隊長補佐「見たいような……見たくないような」

さて、次話では皆大好き（少なくとも私は大好き）彼女の登場！！

隊長補佐「結局調味料って何なんだよ！！」

ＰＳこの作品は深刻な鉄分不足です。

鉄分に関わるプレゼントをくれたら隊長補佐に与える“調味料”の出番が増えます。

外出する1日（昼）（前書き）

少し更新が遅くなりました。

ギンガの口調に自信がありません。

違和感があったら教えてください！！

今回は『ゼロすさん』のリクエストを元にしています。

外出する1日（昼）

制服のまま六課を出た俺は彼女との待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所は本局付近にあるカフェだ。

俺がカフェに入ると既に彼女は席に座っていた。

彼女は俺を見かけると手を振る。

「久しぶりだね、補佐くん」

「お久しぶりです、ギンガさん」

彼女――――ギンガさんに挨拶をして俺はギンガさんの前の席に座る。

「ナンバーズの調子はどうですか？」

俺は早速ギンガさんに本題を訪ねる。

「皆順調ね

「もう少しで更正プログラムも終了するわ」

……そっか。

「それはよかったです」

そんな会話をしていると2人の間に皿が置かれる。

「……えーと」

大きめの皿の上には大量のサンドイッチが置かれていた。

ギンガさんは何食わぬ顔でサンドイッチに手を伸ばす。

「俺達は今から昼食を食べに行くんですよね？」

ここはあくまでも待ち合わせ場所のはずだ。

「ええ、そうよ」

大量のサンドイッチを次々に食べ始めたギンガさん。

……可笑しいのは俺なのか？

「ふふふ……

「久々に君に会えて嬉しいわ

「わたし以外の人に気をとられてないか心配で心配で――

「でも、今日は一緒だもんね

「……今日だけは」

ギンガさんはニコニコとした笑顔でサンドイッチを食べながら俺を見つめる。

……相変わらずだな。

軽くため息を吐きながらそんな彼女の様子を見ることにした。

――――――

ギンガさんに会ったのはナンバーズの様子を聞く以外にも目的があった。

その目的は前々からの約束を果たすためだ。

『近くに美味しいランチがある店ができたから今度一緒に行こうよ』

とのことだ。

ギンガさんとの約束はなるべく断りたくないため俺は二つ返事で了承し、今日ナンバーズの様子を聞くついでに行くことにしたのだ。

「ここだよ」

ギンガさんに着いていくとそこには真新しそうな店があった。

「君がわたしとの約束を覚えていてくれたなんて嬉しいわ」

店内に入り案内された席に座るとギンガさんが口を開いた。

「ギンガさんとの約束は忘れませんよ」

俺が言うとギンガさんは嬉しそうな笑みを浮かべる。

「わたしも君との約束は忘れないよ

「君は特別だからね

「君が関わったことを私が忘れる分けないわ」

……変わらないな。

以前からギンガさんは俺の前ではこんな調子だ。

「今日はわたしが奢るね」

ギンガさんがそう言うとメニューを手に取る。

「俺が奢りますよ

「ギンガさんには何時もお世話になってるんですから」

ギンガさんは六課に入るよりもずっと前――

それこそ、まだ俺が暗い性格だったころからの付き合いだ。

その時の立場上ギンガさんのほうが上ということもあり彼女からはよく奢ってもらったりしていた。

その時の恩返しにもなれば――――

「君が私に食事を奢ってくれるだなんて……

「珍しいね」

からかうように言うギンガさん。

「だったら、お言葉に甘えようかな」

嬉しそうな笑みを浮かべながらギンガさんはウェイトレスを呼んだ。

「これとこれとこれと、後は……これをお願いします」

次々に注目しだすギンガさんを見ながら自分の軽はずみな行動を早速後悔した。

……こんど奢ることにするならバイキング形式の店にしよう。

そう決意しながら俺はメニューに目線を移した。

……高いのを頼んだら支払いできないかもな。

――――――

大量の皿を重ねながらもなを食べ続けるギンガさんえお見ていると連絡が入った。

「隊長補佐ーーー！！」

通信を開いてすぐに彼女の叫び声が聞こえた。

「いきなりなんだスバル……」

連絡をしてきた彼女――――スバルの叫び声に耳を押さえながら俺は言う。

「どうしたのスバル」

ギンガさんも食事を中断してスバルに言う。

「ギン姉と遊びに行くんだったら私にも一声かけてくださいよ！！」

……あそびじゃないんだけどな。

「いいスバル、わたしと補佐君は遊んでるわけじゃないのよ

「補佐君もわたしも仕事の話をしてるの

「スバルが考えてるほど楽しくはないよ」

ギンガさんが困ったように言うとスバルは悲しそうに言う。

「……楽しくなくても私は3人で一緒に居たかったな

「ギン姉も隊長補佐も何時も忙しそうだもん

「……私に構ってくれないし」

……同じ六課にいるといっても俺は隊長や副隊長達といるし、ギンガさんはナンバーズの更正プログラムのせいもあり最近は忙しい日々が続いているらしい。

「……ごめん、スバル

「お詫びとは言えないが、また今度一緒3人でどこかに行かないか？

「3人共休暇を取ってさ」

俺に続くようにギンガさんが言う。

「わたしもスバルと補佐君の3人で何処か行きたいな」

スバルはそれを聞くと満足そうに頷く。

「私も3人でどこかに行きたい！！」

……少しは元気になったみたいだな。

「それじゃ、今から訓練だから切るね！！」

それだけ言うと通信が切れた。

通信が切れるとギンガさんが申し訳なさそうに言う。

「ごめんね、補佐君」

「別にいいですよ

「たまにはスバルと出かけたいですしね」

ギンガさんが悪いんじゃないんだ。

「それでも、3人で出かけたいって言ってくれて嬉しかったよ

「補佐君がわたし達姉妹のことを考えてくれて嬉しいなー

「ねぇ、補佐君あの話なんだけど……

「やっぱり、考え直してくれないかな」

スバルさんは黙ると俺の返事を待つ。

「考え直すって六課を抜けてナンバーズの更正プログラムの手伝いをしないかって話ですよね」

……俺は六課を抜けれない。

抜けるわけにはいかない。

「すいません、こればっかりはギンガさんの頼みでも……」

俺が申し訳なさそうに言うとギンガさんが慌てて応える。

「別にいいんだよ！

「補佐君が六課にいたいならわたしは無理に抜けさせようなんて考えない

「補佐君が好きなようにするといい

「わたしは補佐君の言うこと全部叶えてあげたいから

「補佐君はわたしのことを気にせず何でも言ってね

「それが補佐君の叶えたいことなら何でもね

「わたしは補佐君のためなら何だってするから」

ギンガさんは淀んだ瞳で俺を見つめる。

――――何時からだろう

ギンガさんが俺にこんなことを言うようになったのは。

――――何時からだろう

――――――

「今日は楽しかったよ補佐君」

昼食を食べ終えた俺とギンガさんはそのまま別れることにした。

「俺も楽しかったですよ」

ギンガさんに会えたのは久々だったため余計に楽しめた。

「そっか……

「もしも六課に居たくなくなったら私を呼んでね

「補佐君の席は何時でも開けてあるから」

それだけ言うとギンガさんは俺に背を向けて歩きだした。

……さて、帰って仕事をしたらシグナムさんとのディナーか。

ゆっくりと歩きながら俺は今日の予定を思い出す。

――――もうすぐ今日の1日も終わりかな。

そんなことを考えながら歩いていった。

外出する1日（昼）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

隊長補佐「最近あだ名が増えてきた隊長補佐です」

ほっしゃんにタホにタイホに……

どれもいい名前をありがとうございます！！

隊長補佐「ありがとうございます」

さて、今回のプレゼントは『ヒロアキ１４１さん』から頂いた『釘と一緒に煮込んだ黒豆６キロ』です。

隊長補佐「……今回も“調味料“でたのか？」

“調味料“は出てないぞ『今回は』。

隊長補佐「意味深なセリフ！？」

お前はちゃんと食べろよ。

次回のためにな。

隊長補佐「……次回更新しないで欲しいな」

断る。

隊長補佐「チクショウ」

ＰＳ今回はヤンデレ要素少なめですが次回は……

外出する1日（夜）（前書き）

少しだけセリフの書き方を変えました。

前回の急なアンケートに応えてくれた皆様本当にありがとうございます！！

とりあえずはこの形に落ち着きました。

今回の話は前回に引き続き『ゼロすさん』のリクエストを少し使わせてもらいました。

外出する1日（夜）

夜、俺は自室にて自身の服装を見る。

……まぁ、着替える必要はないかな。

そんなことを考えながら現在時刻を確認する。

シグナムさんから連絡で聞いた時間にはまだ余裕があるな。

まぁ、待たせるわけにもいかないし先に行って待つことにしよう。

俺は自室を出て待ち合わせ場所に向かった。

――――――

待ち合わせ場所は何時ものように六課の前だ。

俺が着くと既にシグナムさんはいた。

「早いんだな」

俺を見るとシグナムさんは感心したように言う。

「シグナムさんこそ早いんですね」

待ち合わせまでまだ３０分近くあるのに。
「それだけ楽しみにしてたということだ。
貴様だって早く来たのは楽しみだっただからであろう？
何にせよ、貴様と共に居られる時間が増えて嬉しいぞ」
シグナムさんは俺に近づいてくる。
「それでは、行くとしようか」
そう言ってシグナムさんは歩きだした。
俺は歩きだしたシグナムさんの隣で歩く。
――――これからに対する不安を抱きながら

――――――

シグナムさんが言うデートスポットは六課から余り離れてはいない場所にあった。
「着いたぞ」
シグナムさんが足を止めて目の前にある店を見る。

絵に書いたような高級レストラン――――というわけでもないが、見たまんまでいくとしたらそこそこ値が張るかな？　ぐらいだ。

「どうした、行くぞ」

俺を置いて歩きだすシグナムさんに遅れないよう歩きだした。

レストランの中にはカップルであろう人達が沢山いた。

どうやらデートスポットという話は本当らしい。

案内された席に座ってメニューを取ろうとすると俺より先にシグナムさんがメールを手にする。

「この店は少々変わった店でな。
注文は私がしよう」
そう言って目線をメニューに移すシグナムさん。

あれ？
心なしか顔が赤いぞ。

……変わった店か。

可笑しなことにならなければいいけど。

数分後、シグナムさんがメニューから目線を外すと近くにいた店

員を呼んだ。
俺には聞こえないように店員に注文をするシグナムさんの顔を目に見えて赤くなっている。
……本当に何があるんだ？
「何を頼んだんですか？」
店員が離れるのを確認して俺はシグナムさんに聞く。
「楽しみにしているといい」
何故か目を逸らしながら自信満々に言うシグナムさん。
行動と発言が矛盾するほど焦ってるんだろうか。
シグナムさんを見ていても不安しかない。
……本当に何を頼んだんだ？
「時に、補佐よ」
何も言わずに黙っている俺に対してシグナムさんが口を開く。
「今日は何処に行ってきたのだ」
シグナムさんは俺の目を見ながら言う。
「ただの報告なら連絡でいいものをわざわざ貴様を呼んだのだ、

何処に行ったのだろう？
なに、私も鬼ではない。
貴様が素直に言えば、そこまで痛くはしないでやろう。
だが、貴様が黙秘すると言うのなら――――
遠慮なくやるとしよう」
素直に言っても何かされるの！？
……シグナムさんの目は本気だし、何よりもこの人はこんなくだらない冗談は言わない。
「時間も時間だったんで、一緒に昼食を取りにレストランに行きました！！」
シグナムさんがそれを聞くと口元に笑みを浮かべる。
「私は正直者は嫌いではないぞ。
最も貴様が他の女との関わりを黙秘するとは思えんがな。
だが、私を置いて他の女と昼食か……
貴様はいやいやつれていかれたのかもしれないが、自分が嫌だと思ったら断らないとダメだ。
貴様は押しに弱いところがある。
なに、安心しろ。

そんな弱い貴様を私が守ってやる。

――――誰が相手でもな」

……初めてシグナムさんと出会った時では考えられないセリフだ。

シグナムさんは初めは俺を嫌っていた。

だが、今は嫌われていない。

……むしろ、好かれすぎたかんがあるな。

――――好かれ過ぎてしまったんだろう。

お互いに黙っていると店員に声を掛けられた。

「お飲物でございます」

そう言って大きめなグラスを1つテーブルの真ん中に置いて戻っていく。

「……あの、シグナムさん」

俺は顔を真っ赤にしたまま動かないシグナムさんに話し掛ける。

「何でグラスは1つなのに、ストローは2つなんですか？」

逆だった場合は店員側のミスなんだろうが、この場合は意図的なんだろう。

「決まっているだろう。
ここはそういう店なのだ」
俺はそれを聞いて周りを見渡す。
よくみたら、カップルであろう人達は皆同じモノを2人で仲良く分け合いながら食べている。
――――もしかして
「この店はな、カップル専用なんだ。
1つのものを頼み、それを2人で食べるのがこの店のルールだ」
思い出した！！
少し変わった店が六課の近くで出来たってスバルが言ってた。
変わった店ってここのことだったのか！？
「私達のような……カ、カップルにふさわしい店だと思わないか」
更に顔を赤くしながらシグナムさんはストローを手にする。
「補佐も飲んだらどうだ」
そういって飲み物を飲みはじめるシグナムさん。
その目は俺を睨んでいる。

『飲まなかったら後で覚えておくんだな』

念話を使わなくてもシグナムさんが言いたいことの予想が付いた俺はストローを手にして飲み物を飲みはじめる。

シグナムさんは恥ずかしいのか顔を真っ赤にしだす。

冷静に思考しているが、俺の顔も真っ赤なんだろう。

お互いに黙って飲み物を飲む。

2人の距離は鼻先が触れ合いそうになるぐらい近い。

……恥ずかしい。

でも、何処か違和感がある。

言葉には上手く出来ないが、違和感が――――

少ししてシグナムさんが離れたため俺も離れる。

「あの、シグナムさん」

顔を赤くしながら俺を見つめるシグナムさんに言う。

「楽しくないですか？」

シグナムさんの表情が目に見えて固まる。

……そう、詰まらなそうなんだ。

いや、そこまで言えば言い過ぎになるんだろう。

――――でも

「何故いきなりそんなことを言う。
もしかして詰まらなかったか？
だとしたらすまない。
私はこういうのが初めてでな、何をしていいかも何処に行ったほうがいいかもわからないんだ。
……すまない」

俯きながら申し訳なさそうに言うシグナムさん。

――――違う

「シグナムさん。
何処か無理してませんか？」

俯いているシグナムさんに言う。

「何時ものシグナムさんは自信満々で、リーダーにむいてそうなぐらい行動力があって、何時も周りを安心させてくれる心強い存在です」

そう、この人の傍にいるだけで何故か安心してしまう。

でも、今日は違う。

「なんか、今日のシグナムさんはらしくないきがして」

挙動不審というか、何処か自信なさげだった。

「そんなので、本当にシグナムさんは楽しいのかなって思ったんです」

「フフフ……」

俺が言い終わると同時にシグナムさんは軽く笑いながら立ち上がる。

「そうだな、こんなの私らしくない」

俺は口元に笑みを浮かべるシグナムさんに合わせて立ち上がる。

「あの、お客様如何なされましたでさょうか？」

「出る」

短く言うと歩きだすシグナムさん。

「お金は俺が払いますね」

「は、はぁ」

困惑している店員に言いながら、歩いているシグナムさんの横顔を見る。

――――自信に溢れた横顔を見る。

――――――

シグナムさんと次に着た場所は六課の訓練場だ。

着くと早速シグナムさんはデバイスを展開する。

「……何やるきですか？」

まさか、こんなシチュエーションになるとは思いもしなかった。

「決まっているだろう」

シグナムさんは冷たく言うとデバイスであるレヴァンティンを振り上げる。

「駄目な男にお仕置きだ」

そう言って振り下ろしたレヴァンティンが俺の左肩を軽く切る。

「――――っ！？」

急な出来事に体と思考が追い付かなかった。

棒立ちだった俺は自身の左肩を見てゆっくりと膝を地に着ける。
左肩は軽く切れており、そこから血が流れている。
「あぁ、意外と楽しいものだな、駄目な男の飼育も」
シグナムさんは恍惚とした表情で俺を見ながら近づく。
「貴様が私以外見ないようにしないとな」
シグナムさんが俺を指差すとバインドにより俺の動きを止める。
「これが私らしささ」
そういって今度は腹を横一線に切る。
「昔から刀を手にして戦ってきた」
朦朧とした意識のなかシグナムさんが近づいてくるのを見る。
「男と接するのも常に戦いの中だけだ。
それだけで充分だ。
充分だと思っていた」
シグナムさんが膝を地に着けている俺に顔を合わせる。
「初めてだよ。
戦いの外で私は初めて気になる男ができた。
それが、貴様だ」

シグナムさんは俺の腹に顔を近付けると、先ほど切られた傷跡を見つめる。

「貴様を私のモノにするにはどうしたらいいんだろうな。
貴様が私以外を見なくするにはどうしたらいいんだろうな。
私にはわからないよ」

シグナムさんは俺の傷口を舐める。

なま暖かい感触だ。

何回か舐めると今度は右手で俺の血に触れる。

「私には戦いしかないからな。
思いを告げたり、好きになってもらったりするにはどうしたらいいのかいまいちわからないんだ。
だから、貴様を切る。
貴様が私のモノだと思わせるように――――
貴様が私の傍にいるように目印をつけておこう。
なに、殺しはしない。
ただ、気絶はするかもしれないがな。
……いや、してもらうか。
そっちの方が抵抗されないから楽だな」

気絶してもらうって……一体。

俺は立ち上がるシグナムさんの顔を見る。

未だに恍惚とした顔で此方を見ながら言う。

「おやすみ」

その言葉を最後に俺は意識を手放した。

――――――

翌日、目を覚ました俺は自室にいた。

起きて直ぐに鏡で自分の体を見る。

腹に包帯が巻かれていたためそるを外し、傷跡を見る。

そこには、横一線のあとがあった。

……これは気絶する前に切られた場所だよな。

俺がそんなことを思っているとテーブルの上に一枚の手紙が置いてあることに気付く。

手紙を手にして内容を見る。

『私は私らしく貴様を手に入れてみせる。

どんな手を使ってもな』

字からしてシグナムさんが置いていったんだろう。

……まぁ、切られなかったしいい……のかな？

能天気にそんなことを考えながら俺は部屋を出た。

――――外出する1日は終わった。

今から毎朝恒例のシグナムさんとのランニングだ。

シグナムさんはどんな表情で俺を出迎えるのだろうか。

昨日の行動にやりすぎたと後悔して気まずそうな顔か

昨日のような恍惚とした顔か

どれにせよ、これだけはわかる。

きっと、シグナムさんらしい表情だということが。

外出する1日（夜）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

「大変な目にあった隊長補佐です」

まぁまぁ、落ち着けって。

これあげるからさ。

「飲み物かよ」

『ヒロアキ１４１さん』からプレゼントしてもらった『鉄の味がする（ボソ』『生イチゴ１００％ジュース』だ。

「イチゴは好きだ」

ほら、おいしく飲めよ、輸血代わりだ。

「輸血……？

まぁ、いいや」

美味しいか？

「……鉄の味がするけど、美味しいぞ」

……最近、俺はお前が吸血鬼じゃないかと疑うことが多くなった

よ。

「なんで！！？」

ＰＳ今回の書き方を読みづらいと思ったらコメント下さい。

コラボする1日（前書き）

夷「湊、タホに合わせてくれ」

湊「急に何だ」

夷「合わせなかったら――――」

湊「わかったからその振り上げた手を収めてくれ」

夷「それと、俺が消えてもタホは俺のことを忘れないようにしといて」

湊「まぁ、別にいいけど、そのかわり幾つか条件を飲めよ」

夷「だが断る」

湊「わがままますぎる！？」

PS今回は『ケフィアさん』が書いている『ネギま　転生しまし……え？！』とのコラボです。

『湊』は私が書いてる『転生者殺し』のオリ主で本編に出番はありません。

ただの宣伝です（おい

コラボする1日

いつも通りの1日だった。

そんなことを思いながら俺は自室に帰って来た。

「……あれ？」

部屋にあるテーブルの上には見たことが無い紅茶のセットが置かれていた。

「何だこれ？」

上には紙が添えてあり俺はそれを見る。

『タホへ　これでも飲んで疲労回復しとけよ』

……プレゼントか？

俺は自室にあるポットでお湯を沸かす。

有り難く貰うとしよう。

その日の最後に飲んだ紅茶は少し甘く、飲んだだけだというのに疲れが取れていく感じがした。

――――このプレゼントは誰がくれたんだろうか。

今度お礼しないとな。

そう思いながら、ゆっくりと瞼を閉じ今日は寝ることにした。

――――――

よぉ夷だ、タホの奴プレゼントを気に入ってくれたらしいな。

ん？　何故気に入ったかわかるかって？

そんなの簡単な話だ。

タホが紅茶を飲む前からこいつの部屋の天井でスタンバってたのさ！！

タホが軽く笑みを浮かべながら紅茶を飲むところや、突然のプレゼントで困惑するところ、更には寝るところまで全て見ていたのさ！！

ついでに、全て盗さt――――ゲフンゲフン

カメラを使い写真に収めている。

タホといいゴンといい、ヤンデレと関わると毎日が大変みたいだな。

さっさと誰かと付き合って俺とエヴァみたいに仲睦まじくすればいいものを……

俺は現在時刻を確認する。

『その世界にいられるのは１０時間が限界――――いや、いないほうがいい』

俺がタホに会うためにある男にお願い（というなの脅し）をしたらいわれた言葉。

タイムアップまで、残り　２時間を切った。

さてと。

俺は天井から床に降りるとカメラをタホの寝顔に近付ける。

……最後にドアップで撮ってやるか。

写真はまた後日ヤンデレな彼女達にでも送り付けといてやろう。

俺はシャッターを切る。

と、同時に扉が開いた。

「お兄ちゃん、一緒に寝よー」

「ごめんね、ヴィヴィオがどうしてもって――――」

入ってきた奴らと目が合う。

魔王（なのは）とその娘（ヴィヴィオ）だ。

やっべー！！

しかも、あの目まさか俺の性別間違えて――――

「あれ？

なんで、彼の部屋に女の人がいるのかな？

よくわからないけど、犯罪だよ。

犯罪は駄目なことなんだよ。

駄目なことをした人にはお仕置きしないとね」

間違えてる！！！？

くそ！　こうなったら魔眼で――――

『あと、この１０時間という間はお前の異能の力は全部使えなくしてあるからな』

そうだった！！

魔眼使えねぇじゃん！！

でも、身体能力は健在なんだ。

ここから逃げることぐらいは――――

俺はヤンデレな彼女達からの逃亡劇を始めた。

――――――

……騒がしいな。

俺は起きると時計を見る。

寝始めてからまだ1時間ぐらいしかたっていない。

俺は寝間着のまま騒がし場所へと歩いていった。

――――――

「何やってるんですか？」

自室近くにある廊下にてなのはさん、フェイトさん、ヴィヴィオが彼女を見ていた。

彼女は正座しながら、俯いている。

本当になんなんだ！？

「あっ、ちょうどよかった。

今からあなたの部屋に行こうとしていたの」

フェイトさんが俺の方を見ながら言う。

「俺の部屋に？」

「うん。
この人、君の部屋にいたから君の知り合いかどうか聞きに行こうとしてたの」

今度はなのはさんが応える。

俺の部屋にいた？

こんな人見覚えないぞ。

「……タホ」

「ッ！」

俺は彼女を見る。

タホってあの手紙に書いてあったやつか？

……そういえば、タホって何だ？

「俺の知り合いですけど――――」

「知り合い？」

俺が言い終わる前にフェイトさんが口を開く。

「ただの知り合いがこんな時間までいるの？
すこし可笑しくないかな？
それに、こんな時間に男女二人っきりでいるのは駄目だと思うな。
どっちにしても、彼女とは少しお話しないといけないけど」

そういうとフェイトさんは彼女に近づく。

「まっまて！
だから、俺は男だって！！」

男なの！！

どこからどうみても美少女にしか見えないんだけど！？

「嘘はよくないよ。
君みたいな人が男の人なはずがないよ」

なのはさんも彼女……いや、彼に近づく。

このままじゃ危ないかも！！

俺は彼と2人の間に入る。

「待ってください！」

「なんで君が庇うの？
別にそんな人どうなってもいいじゃん。
君には私達六課のメンバーが居るんだよ。
今さらそんな人が消えたって何も変わらないよ」

「なのはの言うとおりだよ。
あなたには私達が居るんだよ。
その人は邪魔でしか無いよ。
それとも、私達よりもその人の方がいいのかな？
だとしたら、嫉妬で狂いそうだよ。
ねぇ、早く退いてよ。
あなたがそんな人の傍にいる必要は無いんだから」

……どうする？

ここで退いたら彼の身が危ないし、退かなかったら無理やり退かされそうだし……

「どうするんだ、タホ」

だから、タホって何だよ。

「どうしましょうか」

……強行突破でもやってみるか？

俺がそんなことを考えてると彼が急に手をたたく。

「コレを見ろ！！」

そう言って立ち上がるとカメラを見せる。

「「「カメラ？」」」

意味がわからない。
この局面でカメラを出す意味がわからない。
「このカメラのなか、気になるか？」
彼がそう言うとなのはさん達に近づく。
「なっ！　危ないですよ！！」
「大丈夫だって。　俺に任せとけ」
彼は自信満々に言うと小声でなのはさん達に何か言う。
残念ながらここでは聞き取れない。
少しして彼がカメラをなのはさんに渡す。
「それじゃ、おやすみなさい夷さん」
「余り遅くならないようにね」
「ばいばい、夷さん」
なのはさん達は笑みを浮かべながら3人仲良く帰って行った。
……えっ？
「ミッションコンプリート」

「ちょっと待ってぇぇぇぇぇ！！！！」

なにがあったの！？

あの短い間間になにがあったの！！

「たっく、うるさいな」

彼は俺を置いて歩きだす。

「タホの部屋に行こう。　話はそれからだ」

……腑に落ちないこともあるけど――――

あれ？

「あの、それなんですか？」

俺は彼を指差す。

彼の体が徐々に灰になっていってるのだ。

「なっ！　もう時間かよ！！」

彼が此方を向く。

「あの！」

彼が何か言う前に俺が口を開く。

「紅茶美味しかったです！！」

タホと書いてたんだし、恐らく彼からのプレゼントなんだろう。

「……そうかよ。　面と向かって言われると恥ずかしいな」

彼は頭を掻きながら続けて言う。

「また今度プレゼントしてやるよ」

有難い話だ。

あの紅茶は気に入ったしな。

「そういえば、自己紹介しつなかったな」

体の半分以上灰になってるというのに彼は落ち着いて言う。

「両希　夷だ」

「俺は――――」

「タホだろ」

「違いますよ！　つーか、タホって何なんですか！？」

彼――――夷さんは笑いながら灰になり、消えていった。

……何だったんだよ。

ため息を吐きながら自室に戻る。

――――次のプレゼントは何時かな。

軽く笑みを浮かべながら、俺は自室に戻る。

――――今度は一緒に飲みたいな。

コラボする1日（後書き）

こんにちはー勠bでーす

タホ「隊長補佐です」

先ずは一言。

タホ「なんだ？」

ケフィアさんすいませんでした！！！！！

タホ「早速土下座！？」

……夷さんの口調全然違うし、性格違うし、話のネタパクったし、宣伝とか言って湊出したし。

タホ「……焼き土下座だな」

そこまで！？

PSケフィアさんマジですいませんでした！！

口調や性格等に違和感があれば書き直します。

稽古する1日（早朝）（前書き）

ちょっとしたＢＬ要素があるかもしれません。

気にしないでください

稽古する1日（早朝）

外出する1日が終わった次の日。

俺は毎朝恒例になりつつあるランニングのパートナーがいる待ち合わせ場所へと向かった。

が、そこには誰も居なくてただ一枚の手紙が置かれているだけだった。

俺は手紙を拾う。

その手紙には短くこう書かれていた。

『今日の稽古は休みだ』

……連絡してくれればいいのに。

まぁ、今日のランニングが無くなったのは内心嬉しく思う。

昨日自分を切った人とランニングするだなんて一体どんな顔をしてればいいのかわからない。

シグナムさんもそう思って今日のランニングを休みにしたのかな？

とりあえず、ここにいる必要はないか。

俺は手紙をポケットに入れ振り返って歩きだす。

帰ってなにやろうかな。

久々に訪れた朝の自由時間を少しでも有効活用したいな。
俺は朝の予定を決めながら自室へと向かった。

――――――

「あっ、兄さん！」

自室近くに着くと突然後ろから声がした。
俺は声がした方を見る。

「おはようございます、兄さん！」

嬉しそうな笑みを浮かべているエリオがいた。

「おはよう、エリオ」

俺がエリオに挨拶を返すと彼は首を傾げながら言うと。

「兄さんがこの時間にランニングに出かけてないなんて珍しいですね」

「今日はランニングが無しでね。　珍しい朝だよ」

本当に珍しい朝だ。
ランニングを始めてから初の休みだ。
「エリオはどうしてこんな時間に起きてるんだ？　朝練にはまだ時間があるだろ」
ただでさえ休みが無いんだ。
睡眠ぐらいはちゃんととらないと体を壊すぞ。
「僕は最近自主練習を始めたんで、そのために早く起きてるんです」
偉いねー
俺には到底真似できないな。
……そうだな
「なぁ、エリオ」
「どうしたんですか、兄さん」
エリオは俺に一歩近づく。
「その自主練習、少し付き合ってもいいか」
自室に籠もるのもいいけど、こっちのほうが面白そうだ。
エリオは俺の話を聞くとみるみる嬉しそうな笑みを浮かべる。
「兄さんが自主練習に付き合ってくれるんですか！？」

「と言っても、俺は戦えないから見るだけだけどな」

「それでも嬉しいです！！」

エリオは俺の手を取ると引っ張る。

「それじゃ、早く行きましょう！」

俺はエリオに合わせて歩きだす。

……楽しそうに笑ってるな。

自分のことを兄と呼ぶ彼の横顔を見ながら、歩きだした。

――――――

六課から少しだけ離れた場所にてエリオは自身のデバイスを振るう。

そういえば、エリオが俺のことを兄さんってよびはじめたのは何時からだっけ。

ふと、そんなことを考える。

……キャロよりも早かったっけ？

まぁ、好きに呼べと言った憶えはあるけど。

俺はエリオを見る。

もしも、俺とエリオが戦ったらどうなるだろうか？

いや、考えなくてもわかるか。

俺が負けるに決まってる。

……子供に負けるんだよな、俺

……少しは鍛えようかな

「……兄さん？」

俺がくだらないことを考えているとエリオに話し掛けられる。

「やっぱり僕と一緒じゃつまらないですか？」

俯きながら言うエリオ

「つまらなくなんか無いよ。　ただ、少し考え事をしてただけ」

「考え事？」

首を傾げながら聞くエリオに俺は言う。

「エリオがこんなに頑張って強くなろうとしてんだし、俺も強くならないとなーなんて」

「強くなる必要なんかないですよ！！」

エリオは珍しく声を荒げて言う。

「兄さんは強くならなくていいです！！
だって、兄さんの分も僕が強くなってみせますから！！
兄さんが強くなる理由なんかないですよ！！
僕が兄さんの力になってみせます！！
兄さんの邪魔者は全て僕が消すし、兄さんが守りたいものは全て僕が守る！！
だから、兄さんは強くならなくてもいい。
僕が兄さんを守から」

エリオは俺に近づく。

……子供に守られる大人か

普通は逆だろ。

でも、その気持ちは有り難いな。

俺はエリオの頭に手を乗せる。

「ありがとう、エリオ。　でも、無理なんかしなくてもいいんだ」

俺はゆっくりエリオの頭を撫でる。

「……無理なんてしてませんよ。
僕は僕のために強くなるんです。
兄さんをずっと守れるぐらい強くなりたいから――――」
そういうのを無理って言うんだよ。
俺は時間を確認する。
「そろそろ朝練始まるし戻ろう」
「はい、兄さん」
エリオは素直に俺の言うことを聞く。
俺とエリオはゆっくりと六課に向かって歩きだした。

――――今日は変わった1日の始まりかただ
そんなことを考える
――――なんだか大変な1日になりそうだ
軽くため息を吐く
……あっ

俺はちょっとしたことを思い出す

昨日の昼から何も食べてない。

飲み物しか口にしてない。

……六課に着いたら先ずは朝食か。

稽古する1日（早朝）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

隊長補佐「俺以外の男キャラ初登場だったな」

今回のプレゼントは『白き修羅さん』から頂いた『なんか腹からなんか飛び出している、隊長補佐似のぬいぐるみ』です！

隊長補佐「プレゼントが病んでる！？」

このプレゼントは誰に渡そうかな？

隊長補佐「エリオでいいだろ、初登場だし」

隊長補佐でいいや。

隊長補佐「いやだよ！！　このぬいぐるみ怖いんだけど！！　無駄に似てて怖いんだけど！！　腹からなんか飛び出してるのが余計に怖いんだけど！！　まるで俺の最後を指してるようで怖いんだけど！！」

怖くない怖くない（笑）

隊長補佐「歯を食い縛れ！！！！」

ＰＳ病みつき学園連載始めました

稽古する1日（訓練）（前書き）

謝罪の言葉は後書きで書きますので、出来れば後書きにも目を通してくださいな。

稽古する1日（訓練）

今日の昼は隊長補佐という肩書きとは余り関係ない仕事だ。

キャロの訓練

定期的に俺はキャロの訓練をしている。

今日はちょうどその日で、キャロと2人っきりでいる数少ない時間だ。

「頑張ろうね、キャロ」

他のメンバーとは少し離れたところに着くと俺は言う。

「はい！

訓練お願いします、お兄ちゃん」

満面の笑みを浮かべながらキャロは応えてくれた。

「お兄ちゃんみたいに皆を守れるぐらい強くなって、お兄ちゃんを守るために頑張ります。

お兄ちゃんを狙う人達にも負けないぐらい強くなって、お兄ちゃんを守からね」

……反応に困る

苦笑いを浮かべながらキャロの意気込みを聞き、俺は今回の訓練

内容を言う。

「じゃ、キャロ。　今回は――――」

俺のことを満面の笑みを浮かべながら見ているキャロを見ながら、訓練が始まった。

――――――

「きゃっ！！」

「キャロ！？」

短い悲鳴と共に上空から彼女がバランスを崩し、地面へと落ちていく。

俺は急いで彼女と地面の間に立ち、落ちてきたキャロを受け止める。

「大丈夫かキャロ」

彼女の名前を呼んでみるが、返事が無い。

「キャロ？」

息はしているし、最悪な事態では無いのであろうことはわかって

はいるが……

とりあえず、こんなところにいるわけにもいかないか。

俺はなのはさんに連絡を入れて医務室へと走った。

――――――

「う……うーん」

「やっと起きた」

医務室に置いてあるベッドにキャロを寝かせて2時間ほど立つと彼女は意識を取り戻した。

「お、お兄ちゃん！？」

俺を見て起きようとする彼女を手で止める。

「気を失うぐらい疲れが溜ってたらしいよ」

シャマルさんがそう言っていた。

まだ子供のキャロにこんな毎日のようにキツい訓練をさせてるんだ、こうなってもおかしな話ではないな。

……あれ？

そういえば、シャマルさんは何処に……？

「……ごめんなさい」

俺がシャマルさんを探そうとするとキャロは俯きながら短く言う。

「私の訓練のために時間を割いてくれたのに……」

「別にいいよ」

俺はキャロの頭を軽く撫でる。

「こうしてキャロの傍にいられたし、キャロの寝顔を堪能させてもらったしね」

「お兄ちゃんが言うんなら私は何時でもお兄ちゃんと寝るよ」

恥ずかしがるかと思ったのに、まさかの発言に俺が軽く驚いてしまった。

「お兄ちゃんが言うんなら私は何だってするもん。
お兄ちゃんのためなら私は何でもするし、何かしたい。
……でも」

キャロは言いにくそうにまた俯くと黙ってしまった。

「キャロは何もしなくてもいいんだよ」

「っ！」

俺が言うと、キャロは俺を見る。

「それって、私が何も出来ないから？
……嫌だよ
お兄ちゃんに嫌われたら、私には何にもないよ。
私にだって、お兄ちゃんに役立つことの１つや２つあるよ！
だから、見捨てないで。
お願い……お兄ちゃん」

キャロは俺に縋るように言う。

「大丈夫だよ」

そんなキャロを少しでも落ち着かせるために、出来るだけ優しく言う。

「俺はキャロを見捨てないし、見捨てることもない」

「……お兄ちゃん」

「だから、キャロも俺を見捨てるなよ」

俺の言葉を聞くと彼女は大きく首を縦に振る。

「私がお兄ちゃんを見捨てるはず無いよ。
私は他の皆とは違うもん。
私はいつまでもお兄ちゃんの傍にいたい。
誰かに何を言われても、私はお兄ちゃんの隣にいたい。
私はまだ、お兄ちゃんを守れるほど強くないけど――――
それでも、何時かは

何時かはお兄ちゃんを守れるぐらい強くなって、ずっとお兄ちゃんの隣にいたいな」

キャロは俺を見ながら言う。

俺の隣にいたいということを

キャロの夢であり、叶えたい願いを

……夢か

そういえば、昔はくだらない夢があったな。

『家族と水族館に行きたい』

叶うはずがない夢があったな。

それを思い出すと、まるでセットかのように思い出した。

金髪の少女に言われたセリフを

『だったら、私があなたの未来のお嫁さんになってあげる』

……懐かしい思い出だ

彼女は俺のことを覚えてるのかな。

……？

まてよ、当時の俺はまだ子供で、金髪の彼女は俺より少し上で—

――――

「お兄ちゃん？」

「っ！　どうかした？」

思考の波に呑まれかけていた。

……でも、万が一彼女が彼女だったら

「お兄ちゃんの夢ってどんなのですか？」

キャロの質問に俺は戸惑う。

――――叶わない夢

――――叶うはずがない夢

でも、そんな夢を彼女は――――

「水族館」

俺は言う。

馬鹿馬鹿しい夢を

「家族と水族館に行きたいな」

叶うはずがない夢。

でも、叶うかもしれない。

金髪の彼女がもしも――――

「私も水族館に行ってみたい！」

もしも、彼女が――――

「遊園地とか行きたくない？」

――――フェイトさんだったら

今度聞いてみようかな。

俺はそう思いながら、キャロとの会話を続けた。

まさか、この会話を聞かれてるとも知らずに――――

――――

私は聞いてしまった。

キャロが倒れたことをシャマルから聞き、今すぐにでも駆けつけようとしたところ、疲れから来るものだから心配ないと言われたか

ら、私は仕事を早めに終わらせてから医務室へと向かった。
私が医務室に着いた頃にはすでにキャロは起きていて彼と少し込み入った話をしていたから、私は話が終わるまで部屋の前にいることにした。

――――そして

「お兄ちゃんの夢ってどんなのですか？」

キャロは彼に聞く。

そのセリフを聞くと私の心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

今まで聞かなかった。

私はあの時のことを昨日の事のように覚えている。

でも、彼はどうだ？

あれから性格が変わった彼は覚えているのだろうか。

……覚えてなかったら

そう考えると胸が締め付けられるように痛む。

彼が忘れてたら、私の夢も忘れていることになるんだろう。

『彼のお嫁さんになること』

子供の頃からの――――
彼と出会った頃からの夢。
もしも、彼が忘れてたら――――
「水族館」
彼は短く応えた。
「家族と水族館に行きたいな」
覚えててくれた……のかな？
ううん、きっと覚えてたんだ！
彼は、私の夢も覚えてくれてるよね。
そうに決まってるよ。
彼が私のことを忘れる分けないよ。
だって、私は――――
未来のお嫁さんだもんね。
私はキャロの様子見など忘れてそのままその場を離れた。
彼との出会いを思い出しながら

彼とのこれからを考えながら

あぁ、そうだよね

愛してるよ

あなたは私が守からね

何が相手でも、私が――――

稽古する1日（訓練）（後書き）

こんにちはー勁bでーす

さて、今回の後書きはプレゼント紹介ではなく謝罪です。

すいませんでしあぁぁぁぁ！！！！

タイトルにある『稽古』の要素0だし！（しかも次話も）

疲れが溜まって気絶とかしちゃうし！

なんか、フェイトさん登場しちゃったし！

途中からフェイトさん目線になっちまったし！

本当に申し訳ございませんでした！！

今話は次話へのフラグ（）と次の1日のためのフラグ（）とでも思ってくれれば助かります！！

PS最後にフェイトさん目線の話を書いていて思いましたけど、これからもたまにこういうヒロイン目線の話を最後に少しだけ入れてみようかな？

稽古する1日（夜）（前書き）

今回は『ゴッティーさん』のリクエストです。

これを書きたいがために稽古する1日を書きました。

後悔はしていません（キリッ

稽古する1日（夜）

キャロと医務室来て早数時間

そろそろ訓練が終わる時間だ。

結局、キャロはこの日ベッドで寝かせ、俺は彼女の傍にいた。

「失礼します！」

キャロと世間話をしていると医務室のドアが開き、彼が遅れてやってきた。

訓練が終わって走ってきたのか、息切れしながらも彼は俺とキャロに早足で近づいてくる。

「大丈夫、キャロ！？」

「うん、お兄ちゃんのおかげで大丈夫だよ。
だから、心配しないでね、エリオ君」

それを聞くと彼――――エリオはため息を吐く。

……心配で走ってきたのかな。
キャロが倒れたんだ、訓練が終わって真っ先に駆け付けたんだろう。

「無理しちゃダメだよキャロ」

エリオはゆっくりとキャロに近づく。

「うん、これから気を付けるね」

キャロはエリオに心配掛けたのが嫌だったのか俯きながら呟いた。

「兄さん、キャロを助けてくれてありがとうございます！」

そう言って俺に頭を下げるエリオ。

「別に何もやってないよ」

謙遜なんかではなく事実だ。

ただ俺は倒れたキャロを医務室に連れていっただけなんだ。

誉められるようなことをしたつもりはない。

「兄さんは優しいからそんなことを言えるんですよ。

普通はキャロを医務室に連れていったらそのまま帰るけど、兄さんは傍にいてくれた。

兄さんからすればそれは当たり前かもしれないけど、それは立派なことだと僕は思います！

……やっぱり、兄さんは僕の目標だ」

最後の辺りは小声で呟くように言ったせいでよく聞き取れなかったが、貶されてはいないだろう。

「エリオくんの言う通りですよ！

お兄ちゃんは優しすぎるぐらい優しいから気付かないだけですよ！

お兄ちゃんの当たり前は他の人からしたら凄いことばかりなんで

すよ。
お兄ちゃんは誰にでも優しく接っするんだもん。
……だから皆勘違いしちゃうんですよ
お兄ちゃんが優しすぎるせいで」
キャロは後半攻めるように俺に言う。
……優しすぎるぐらい優しいかな？
俺は俺が思った通りに行動してるだけなんだけどな？
そんなことを考えているとエリオが自身を見ながら言う。
「訓練が終わってすぐに来たんで、一旦シャワーを浴びてきます」
そう言って背を向けるエリオにキャロは両手を合わせ思いついたのかのように自分の考えを口にした。
「せっかくだから皆でお風呂に入ろうよ！」
「「えっ」」
俺とエリオは息を合わせて驚きの言葉を上げキャロを見る。
「そうしよ、お兄ちゃん、エリオくん」
キャロは俺達の名前を呼びながら真っ直ぐ目を見てくる。
……またお風呂に入ろうって
そんなの嫌に決まって……

俺がキャロをどう説得するか考えているとエリオが顔を真っ赤にしながら声を上げる。

「そ、そんな！　あんな恥ずかしい思いもう嫌だよ！」

エリオの言葉を聞くとキャロは悲しそうに俯く。

その瞳には涙が溜まっていた。

「……そっか。　久々に3人でお風呂に入れると思ったのにな」

「「うっ」」

涙目で言われると凄い罪悪感を感じる……

……仕方がない

……のか？

「エリオ」

「……わかりました」

渋るように返事をするエリオを見たあとキャロに視線を移す。

「それじゃ、3人でお風呂に入ろうか」

「はい！」

顔を上げ嬉しそうな笑みを浮かべるキャロ。

……たまにはいいのかもな、こういうのも。

――――――

六課には風呂場もある。

はやて隊長が立案したらしい。

だが、殆どの人がシャワールームを使用するため需要はあるとは言えない。

男湯に関しては、使用する人はごくわずかだ。

そんな男湯にさらにはまだ仕事をしている時間帯である今この時に人影があるはずもなく、恐らく俺達が風呂場から出るまでも人とすれ違うことはないだろう。

とりあえず、風呂場には俺とエリオは始めに入り後からキャロがやってくるようにした。

俺は風呂に浸かりながら隣にいるエリオに言う。

「今更だけど、訓練お疲れさま」

エリオのような子供が前線で戦うことを強いられるほど人手不足

な管理局。

そんな管理局に勤めながらも後方からのサポートしかできない俺。

……ますます自分が嫌になってくる。

「どうしたんですか兄さん　くらい顔して」

「……少しね」

心配そうに言うエリオの頭を軽く撫でる。

「……兄さんは無理して強くならなくてもいいんですよ」

俺の考えていたことがわかったのか、エリオは静かに言う。

「兄さんは強くなくたっていいじゃないですか。
どんなに兄さんが弱くたって僕が守から。
兄さんだけじゃない。
キャロもフェイトさんも
皆を守れるぐらい僕が強くなるから。
強くなって皆を守から。
だから、兄さんは強くなくてもいい。
どんなに弱くても誰にでも優しい兄さんでいればいいと思います。
それが、誰にも真似できない兄さんの強さですから。
……僕も兄さんみたいに強い人間になりたいです。
誰にも優しく出来る、人として強い兄さんみたいな人になりたいです」

エリオは俺を見る。

……強い人間か
そんなことを言われるようになる切っ掛けをくれた彼女には本当に感謝だよな。
俺が彼女のことを思い出していると扉を開ける音がした。
そこには予想どおりキャロが体にタオルを巻いて入ってきた。
キャロは此方に近づいてくる。
エリオはキャロを見て顔を真っ赤にしながら俯いている。
「エリオくん？」
風呂に浸かりながらキャロは俯いているエリオを心配しながら言う。
「ほら、おいでキャロ」
そんなキャロの興味をエリオから俺に向けるように彼女に手を差し出す。
「お兄ちゃん」
キャロは俺の手をとると一気に距離を縮め抱きついてくる。
……は？

「優しいお兄ちゃん」

愛しおしいモノを見るように俺を見つめるキャロ。

「私だけのお兄ちゃん」

エリオも俺も突然のことで驚くことしかできない。

「お兄ちゃんは――――」

言いにくいのかキャロは一瞬顔を伏せる。

「お兄ちゃんは六課が――――」

顔を上げ俺の目を見る。

「お兄ちゃんは六課が解散したらどうするの？」

キャロのその言葉を聞いて、俺は気付く。

――――機動六課解散日

その日まで残り半年も無いことを。

「僕も気になります」

エリオも俺の目を見ながら言う。

……機動六課解散後の自分の居場所

そんなの考えてない。

「やっぱり六課に入る前みたいにフェイトさんのサポートですか？」

フェイトさんのサポートか……

嫌じゃないけど

でも、フェイトさんが幼い頃約束した彼女だったら――――

俺は彼女との約束を――――

何も言わない俺にキャロは何かを察したのか、自分の考えを口にした。

「もし、何も決めてないなら私とエリオくんと一緒の場所に行きませんか？」

キャロとエリオと一緒に？

「まだ何処にするか決めてないけど、それでも私はお兄ちゃんと一緒にいたい！

お兄ちゃんが入る場所なら何処でもいい！」

キャロはそれだけ言うと俺から離れる。

「でも、私はお兄ちゃんに付いていくなんてことは余りしたくない。

お兄ちゃんの邪魔になるぐらいなら死んだほうがマシだもん。

下手に付いてってお兄ちゃんの邪魔になったら――――

だからねお兄ちゃん。

私はお兄ちゃんの手で決めてほしいの。
私とエリオくんとの3人で一緒に居てくれることを――――
お兄ちゃんの手で決めてほしい」

俺の手で決める。
キャロはきっと真面目に言ってるんだろう。

真面目に俺に選んでほしいんだろう。

「僕もお兄ちゃんと一緒に居たいです！
僕とキャロとフェイトさんとお兄ちゃん
皆で一緒に居たいです！」

エリオもキャロに続くように言う。

「……考えとくよ」

逃げるように俺が言う。

そんな言葉でも目の前に入る子供達は目に見えて喜んでいた。

――――どうしようか

六課解散後のことそろそろ考えとかないとな。

ため息を吐きながら今後に不安を抱く。

……キャロとエリオと一緒にいるのも悪くはないかもな。

2人の幸せそうな笑顔を見ているとついついそう思ってしまう。

それに、エリオが言っていた。

フェイトさん

彼女がもし、幼い頃俺のお嫁さんになると言った彼女だとしたら

――――

いや、今はまだそこまで考える必要はないか。

――――今はまだ

こうして、この1日は終わった。

……最後という最後に少し問題があったが

それは、語ることもない話だ。

――――少し変わった始まりをした1日が終わりを迎えた

――――

お風呂から上がった後、私はお兄ちゃんにお願いして今日だけは一緒に寝てもらうことにした。

エリオくんも居るけど関係ない。
お兄ちゃんもエリオくんもベッドに横になるとすぐに眠ってしまった。
私の眼の前にはお兄ちゃんの寝顔がある。
――――お兄ちゃん
私だけのお兄ちゃん
誰にでも優しいお兄ちゃん。
弱くて誰かに守ってもらうことしか出来ないお兄ちゃん。
――――愛してるよ
私だけのお兄ちゃんだもん。
誰にも譲らない。
誰にでも優しいお兄ちゃん。
私がその優しさを独り占めする。
弱くて誰かに守ってもらうことしか出来ないお兄ちゃん。
大丈夫だよ。
私がお兄ちゃんを守ってあげるから。
――――だから
お兄ちゃんは私を守ってね。
その優しさで私だけを――――

私は寝ているお兄ちゃんにキスをした

稽古する1日（夜）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

隊長補佐「隊長補佐です」

いやー、今までに比べたらましな1日だったんじゃない？

隊長補佐「かもな、最後のキャロちゃんの行動以外は」

気にしない気にしない

今回のプレゼントは『ニョロロさん』から頂いた『アイアンメイデン』です

隊長補佐（このプレゼントはいらない）

このプレゼントを隊長補佐に！

隊長補佐「だと思ったよ！！」

それでは、アイアンメイデンスタート！

隊長補佐「ちょ――――やめ――――」

……幼女とキスをした罪は重いんだぜ

ＰＳ次回は番外編かな？

聖夜なる1日（買い物）（前書き）

長くなりそうなので分けました。

クリスマスの買い物だし、クリスマス前でいいよね？

聖夜なる1日（買い物）

「クリスマス？」

俺は目の前にいる彼女――――はやてさんに聞き返す。

「そうや、もうすぐクリスマスなんやで」

クリスマス……

聞き覚えのない言葉だ。

「私となのはちゃんの故郷にある風習なんよ」

なるほど。

「そのクリスマスに六課でパーティーをやるんですか」

先ほど、はやてさんがそう言っていた。

……クリスマスパーティー

その日に何があるのか、期待と不安を胸に抱きながら、クリスマス前日を迎えた――――

――――

クリスマスは、はやてさんは六課を一日中休みにして、朝からクリスマスパーティーの準備を行うらしい。
そして、今日はそのクリスマスのための買い物に行くことになったのだが……

「お兄ちゃん早く行こ」

「そうだよ、六課の皆を待たせちゃだめだよ」

そう言って俺を急かす彼女達――――フェイトさんとキャロだ。

「お2人は何で来たんですか？」

買い物に向かうなか、俺は2人がいる理由を尋ねてみる。

「そんなの簡単だよ。
あなたを心配してるからだよ。
他の女があなたにまとわりつかないように私が見ておかないとね」

「フェイトさんの言うとおりだよ。
これ以上お兄ちゃんにまとわりく人が増えないように、これ以上誰かがお兄ちゃんと仲良くならないように私が見ておかないと」

「……でも」っとキャロは続ける。

「フェイトさんとお兄ちゃんの3人でどこかに出かけたかったんです」

……あれ？エリオは？

「私も何時かキャロと補佐君の3人でお買い物に行きたいと思ってたんだよ」

いや、だからエリオは……

「補佐君は私とだけがいいかもしれないけど、我慢してね。
補佐君が誘ってくれたら、私は何時でもついてくからね。
買い物じゃなくても、何処でもね」

「お兄ちゃんはきっと私と2人で出かけたかったんですよ。
だけど、お兄ちゃんは優しいから、フェイトさんの誘いを断れなかったんですよ。
優しいお兄ちゃんに無理矢理我が儘言わないでくれませんか？」

互いに言うと相手をにらみだす。

「……せっかくのクリスマスなんだから仲良くしましょうよ」

俺が言うと2人は納得したのか、睨み合いを中止した。

――――今日はこんな感じが続くのかな

ため息を吐きながら、クリスマスという1日を恨んだ。

――――――

買い物ということで、デパートにきた俺達は頼まれた物を早々に購入した。

「キャロはプレゼントどんなの買ったの？」

「秘密です。フェイトさんは何を買ったんですか？」

「うん、少し待ってくれ」

荷物係として沢山の荷物を両手に持っている俺は仲良く話す2人に口を挟む。

「プレゼントって何ですか？」

「クリスマスプレゼントのことだよ」

……クリスマスプレゼント？

「はやてさんから聞きませんでしたか？」

キャロは首を傾げながら聞いてくる。

何も聞いてない。

「デパートにきたんだから、ここでクリスマスプレゼント買おうよ」

フェイトさんの言う通りにするか。

「俺はプレゼント選んどきますので、お二人は先に帰っておいてください」

俺は2人に言う。

……が

「何言ってるの？

一緒に探そうよ。

2人で探した方がきっといいの見つかるよ。

キャロにはその荷物は重すぎるから、私達が持ちながらプレゼント選ぼうね」

「その荷物をフェイトさんに渡して先に帰ってもらいましょうよ。

私達2人でプレゼント選びましょう！

そのほうがお兄ちゃんも嬉しいよね。

私と2人だけになった方がお兄ちゃんも嬉しいよね」

……ダメだな

「お二人は帰ってください」

「ほら、キャロが我が儘言うから補佐君が怒っちゃうよ」

「我が儘を言ってるのはフェイトさんじゃないですか」

……この2人といたら話が進まないな。

「プレゼントの中身を知られたくないから帰ってください」

俺が言うと2人は少し考えだす。
「プレゼントは俺が皆に少しでも喜んで貰えるものを選びますから」
そう言うと2人は引き下がる。
「だったら、帰ろうかな。
補佐君の言うことは聞いてあげたいし」
「私も帰ります」
2人は納得してくれたらしい。
……よかった
「それと、プレゼントはね――――」
フェイトさんからプレゼントについての話を聞くと、俺はますますクリスマスという1日を恨むことになった――――

――――――
六課で行うクリスマスプレゼントは渡す人を選べないらしい。
箱に入ったプレゼントを横の人に渡す。
これを、音楽が止むまで続けるらしい。

音楽が止んだときに自身が持っていたのがプレゼントになる。

……つまり、誰に渡かわからないのだ。

面倒なプレゼント交換だな。

そう思いながら、プレゼントを選ぶ。

おっ、これはいいかもな。

六課のメンバーは女性が多いため、女性向けのプレゼントを選んだ。

そして、そのプレゼントを手にした時に横にある『それ』が目に入った。

……これは

俺は『それ』も手にするとレジに並んだ。

――――クリスマス

何かがあるかもしれないけど、それでも皆が楽しく過ごせる1日にしたいな。

――――そんな思いを胸にしながら

……プレゼント喜んでほしいな

聖夜なる1日（買い物）（後書き）

後日談というか、次回予告。

うん、この言い方をすると短編の時の自分を思い出すな。

この言い回しは格好いいよね。
とある作品のオマージュなんだけどさ。
有名な作品だよ。
アニメと映画やるね。
どちらも楽しみだね。

ああ、そうだ、こんにちは、隊長補佐です

自己紹介は大事だよね

次回はアンケートの結果通りのお二人が登場だよ

この２人といい次回の２人といいプロローグと変わらないメンバーだね。

ＰＳ病みつきセイバーの総合評価が１７０達成したよ

正確には１７９だね

病みなのは１７３

病みフェイ後日の１６５を一気に抜いて、病みつき短編の総合評価ではトップになったよ

おめでとうセイバー

聖夜なる1日（当日）（前書き）

アイギス「アイねぇのオールナイト物語出張番！」

全員「始まるよ！！」

隊長補佐「……皆さんのノリについていけない」

♪オープニングＢＧＭ♪

アイギス「というわけで始まりましたアイギスのオールナイト物語出張番、司会のアイギスです！」

隊長補佐「病みつき六課主人公、隊長補佐です」

夷「ここでは二度目だな、ネギま！転生しまし……えっ？！主人公の両希夷だ」

浜也「バカと先輩と召喚獣誰がなんと言おうと主人公の夢想浜也だ！」

識「その竜族は守護銃士なり主人公の黒神識だ」

ダゴン「ヤンデレ機動六課主人公のダゴル・インフェンだ、ダゴンって呼んでくれ」

竜人「巡りのクロニクル主人公の佐山・竜人だぜ」

アイギス「沢山いるわね……」

隊長補佐「後書きにもゲストはいますしね」

アイギス「それじゃ、早速お題に移りましょう」

浜也「お題に移る前に、ケーキ食べようぜ」

夷「俺もケーキを持ってきたんだが……湊達に渡しとくか」

隊長補佐「をきたさんケーキありがとう！」

識「それで、私達が語り合うお題とは何なんだい？」

アイギス「前話についてよ」

ダゴン「前話って言ったら……後書きについてか？」

夷「後日談というか、次回予告だったよな」

竜人「懐かしい言い回しだったよな」

アイギス「あれは無いわ」

隊長補佐「一刀両断！？」

全員「無いな」

隊長補佐「全否定された！？」

竜人「全然次回予告じゃなかったろ」

ダゴン「感傷に浸ってたな」

浜也「あんな次回予告は初めて見たぞ」

識「〇物語の話しか覚えてないね」

夷「偽〇語がアニメ化するとか、傷物〇が映画化するとかなんとか」

全員「あれは無い」

隊長補佐「悪かったな！！」

アイギス「そろそろ本編始まるわよ」

夷「タホが選んだプレゼントは何なんだ？」

浜也「注目するのはそこだよな」

識「いや、プレゼント交換の場面も興味深い」

ダゴン「それと、今回のメインヒロインだな」

竜人「はやてにシグナムか……この2人相手に隊長補佐はどう動くか見物だな」

アイギス「それでは本編！！」

全員「始まるよ」

聖夜なる1日（当日）

プレゼントを買った翌日、今日は朝からクリスマスパーティーの準備をしているのだが……

……やることがわからない

クリスマスツリーという物に飾り付けをしているのだが、実物を知らない俺はただ星形の飾りを持ちツリーの前で立っているだけだ。

「どうかしたのか？」

そんな俺にシグナムさんは声を掛ける。

「クリスマスツリーの飾り付けの仕方がいまいちわからなくて……」

へたにやって間違えたら迷惑だし、何もしないのも迷惑だ。

シグナムさんはそれを聞くと「そうか……」と呟き、俺に近づく。

「ツリーの方を見ろ」

「えっ？」

「早くしろ」

俺は大人しくツリーの方を向く。

そんな俺の背中に柔らかいモノがあたる。

「シグナムさん！？」

「暴れるな」

シグナムさんは俺の手に自分の手をあわせると星形の飾りをツリーにつけていく。

「悩んでいるんだったら私の元に来ればよかったではないか。
私は貴様の悩み事なら全力で力になるぞ。
貴様は何も心配いらない。
貴様の邪魔になるものは私が消してやるからな」

「だから」と言って飾り付けを終えるシグナムさん。

「貴様は何時でも私を頼りにするといい。
いや、私以外を頼りにするな。
貴様が頼る相手は私1人で事足りる。
もしも、貴様が私以外の者を頼ったら――――
どうなるかわかってるだろうな」

「わからんなー」

俺が口を開く前に他の誰かが言う。

「シグナムは彼に何でそんなこと言うの？」

彼女――――はやてさんは人差し指を唇に当てながら言う。

「シグナムは彼の何なん？
シグナムは彼を強要させるぐらい彼と仲がいいん？
そんなことないわな。
あかんで、シグナム
そんな脅しみたいなことしてたら彼が可愛そうやろ」

そう言うとはやてさんはシグナムさんから俺を離し、俺の手に抱きついてきた。

「はやてさ――――」

「君は何も心配せんでもいいんよ。
私が解決するからな。
君に降り掛かる火の粉は全部私が消してあげるから、君が心配することなんて何一つないんよ。
君が心配するとしたら私のことだけで充分や」

優しい笑みを浮かべながらはやてさんは言う。

「お言葉ですが、我が主こそ彼に何か言える立場なんでしょうか。
私と彼は固い絆で結ばれていますが、我が主はどうなんでしょうか。
私と彼のように特別な関係でないのならこの件には口を挟まないでいただけたいのですが……
これは、私と彼だけの問題で我が主には何も関係ないことですので」

そう言って主であるはやてさんを軽く睨むシグナムさん。
睨まれているはやてさんは一瞬睨み返すが、直ぐに優しい笑みに戻る。

「それは違うんじゃないかな？
シグナムからすれば彼は特別な関係かもしれへんけど、彼から見たらシグナムはただの上司かもしれへんよ。
彼の特別な関係である女なんて1人しかいないんやから。
それに、彼が関わることで私が関係ないことは何一つないんよ。
彼が嬉しいと感じたら私も嬉しいし、彼が悲しいと感じたら私も悲しい。
いわば、一心同体の間からである私と彼なんやからな」
はやてさんが言い返すとシグナムさんの睨みがより一層強くなる。
「これ以上私と彼の関係を侮辱するというのなら我が主でも許せませんよ」
「侮辱してるのはシグナムのほうじゃないかな？
自分勝手な思い違いを彼に押しつけたらあかんよ。
だから、金輪際彼に触れるの禁止な」
はやてさんは俺から離れるとシグナムさんに近づく。
「せっかくのクリスマスなんやから、彼を虐めたらあかんよ」
「大丈夫です我が主。
彼だって私の傍にいれて嬉しいはずですから」
な、なんとかしないと！！
睨みを強くする2人の間に俺は立つ。

「シグナムさんもはやてさんも落ち着いて……早く準備を終わらせないとパーティー出来ませんよ！」

俺が言うと2人は納得したのか、クリスマスツリーの飾り付けに戻る。

……よ、よかった

俺も2人と共にクリスマスツリーの飾り付けに戻るが――――

「あっ」

俺が短く言うと2人が同時に俺を見る。

「いや……なんでもないです」

「どうしたん？何かあるなら直ぐに私に言いなよ？」

「貴様が無理をする必要はないのだぞ」

「本当になんでもないですよ」

笑みを浮かべながら2人に言ってクリスマスツリーの飾り付けに戻る。

……今渡すわけにはいかないよな

ポケットに入っている『それ』を手にし俯きながら思う。

――――やっぱり、人と接するのは苦手だ

――――どんなに努力しても、結局俺は……

――――俺は

――――

準備が無事終わり、クリスマス仕様になった食堂を見渡しているとティアナが話し掛けてきた。

「私達の席は何処にします？」

私達の席……？

「私は補佐さんが隣にいればそれで満足なんですけどね」

ティアナがそう言って俺の手を取ろうとすると他のメンバーが口を開いた。

「先駆けはずるいよティア！

私も補佐さんの隣がいい！！」

「駄目だよ2人とも

補佐君の隣にいていいのはわたしだけなんだから。

我が儘ばかり言ってると少しお話しないといけなくなるよ」

「ヴィヴィオはお兄ちゃんの膝に座る！！」

「こいつの膝にはあたしが座るからな」

「駄目ですよ、ヴィータさん
お兄ちゃんの膝には私が座りますから」

収拾つかないぞ！！

殺伐とした空気の中この状況をどうするか考えてると念話が聞こえてきた。

『補佐君こっちこっち』

周りを見渡すとキッチンから顔を出し、手招きしているはやてさんと目が合った。

殺伐とした空気の中話している皆から離れ、はやてさんの元へと急ぐ。

「どうかしましたか？」

「うーん、少し困ったことになってな」

はやてさんがそう言うとキッチンの奥へと歩きだす。

俺もはやてさんに着いていくと――――

「ご馳走ですね」

パーティーに並ぶであろう様々な料理がテーブルに並んでいた。

「皆で作った自信作や」

「でもな……」と苦笑いを浮かべながら彼女は続ける。

「これだけで足りるかな……って思ってな」

……あぁ

六課にはよく食べる人が2人ほどいますからね。

「わかりました、俺も何か作りますね」

「流石は補佐君や！」

俺は適当に食材を選び、嬉しそうな笑みを浮かべる彼女の横に立つ。

「補佐君は料理できるんやな」

「はい、軽いものなら」

出来るかどうか知らないのに呼んだんですか……

「補佐君はいい主夫になれるな」

「主夫って……」

悪戯に言うはやてさんに苦笑いを浮かべながら応える。

「そうや、補佐君補佐君」

俺がはやてさんの方を向くと目の前にクリームシチューを軽くすくったスプーンがあった。

「あーん」

頬を赤らめながら言うはやてさん。

……えっ？

え！！？

「はやてさ――――」

「腕が痺れてきたから早くしてな」

「は、はい！！」

……食べるしかないよな？

食べるしかないよな！！？

俺は恐る恐る口を開けて差し出されたスプーンをくわえる。

「美味しい？」

「……美味しいです」

緊張で味が分からない。

彼女以外からあーんなんて要求されたのは初めてだ。
俺ははやてさんを見る。
頬を赤らめながら先程俺がくわえていたスプーンを凝視している。
「はやてさん？」
「っ！なんでもないよ！！」
スプーンを後ろに隠すと彼女は俺に尋ねる。
「シチュー美味しかったろ。
君に対する愛情を込めて作ったんや。
補佐君に私が作った料理食べさせたこと余りなかったな。
今度作ってあげるな。
むしろ、これから先補佐君のために私が料理を作ってあげよか？
そのかわり、補佐君が口にしていいのは私が作った料理だけな。
補佐君さえよければ、私はかまわんよ。
料理といえば補佐君は軽い料理できるんやったな。
今度私に何か作って欲しいな。
でも、一番は補佐君と一緒に料理がしたいな。
これから先ずっと――――」
はやてさんはそれだけ言うと俺の頬に手を添える。
頬は紅潮し、息が少し荒くなってる。
……やばいやばいやばいやばい！！
俺は話の流れを変える方法を考えてみる。

――――そうだ

「はやてさんに渡したいものがあるんです！！」

俺はそう言って一歩下がる。

「……渡したいもの？」

はやてさんは首を傾げる。

そんな彼女に俺は『それ』を渡す。

「これって――――」

「クリスマスプレゼントです」

俺が言うとはやてさんはプレゼントを受け取る。

「可愛い熊さんやな」

はやてさんが手にしたのは灰色の熊のストラップだ。

「君からプレゼントを貰えるだなんて夢のようやなー」

大事そうにプレゼントを胸に抱える彼女を見る。

「そのプレゼントを皆にあげたいんです」

「皆に？」とはやてさんは首を傾げて聞き返す。

「はい。そのプレゼントの色違いが沢山入ってたのを買って、六課の皆に配ろうと思ってたんですけど……」

俯きながら、一旦間を置いて言う。

「皆こんなプレゼントを貰っても迷惑かなって思うと……
今まで誰かに喜んで貰えるプレゼントを買うだなんて無かったんで、喜んで貰える自信がなくて……
でも、六課が解散しても皆が皆のことを忘れないようにプレゼントしようと思ったら、それが目に入って……
……変……ですかね」

――――変わらない

――――結局俺は何も変わってない

「そんなことないよ」

俯いてる俺の両親に優しく手を添えるはやてさん。

「私はプレゼントを貰って嬉しいよ。
他のみんなはどう思うかはわからんけど、私は嬉しい。
だって、愛しい君から貰ったプレゼントやもん。
なんだって私は喜ぶよ」

はやてさんは優しく言うと俺の頭を自身の胸に押しあてるような形になるよう抱く。

「補佐君は少し臆病になりすぎなんや。
それに、困ってることがあるなら私に相談すればよかったのに……
私が何時でも協力するからね。
今回も――――
これからも――――」

そう優しく言いながら俺の頭を優しく撫でるはやてさん。

――――そんな彼女の優しさに

――――そんな彼女の愛情に

甘えながら、俺は――――

――――

クリスマスパーティーが始まる頃には俺の周りの席は決まっていた。

左がティアナ
右がなのはさん
俺の膝の上にヴィータさん
なのはさんの膝の上にヴィヴィオ

――――そして
俺の前にはやてさん

クリスマスパーティーも順調に進むとはやてさんが立ち上がる。

「さぁ、皆お待ちかねのクリスマスプレゼント交換の時間やで！！」

はやてさんが言うと皆のテンションが目に見えて上がった。

「お兄ちゃんのプレゼントはヴィヴィオが貰うもん」

「君のプレゼントは私が貰うからね」

「補佐さんのプレゼントは私の物ですよ」

「こいつのプレゼントはあたしのだ」

皆が皆を睨み始める中、シグナムさんがクリスマスプレゼントが入った籠を持ってきた。

はやてさんがその籠の中から箱を2つとる。

2つとも真っ白な箱を赤いリボンで結んでいる。

「皆が不正しないように箱を同じやつにしといたからなー　不正なんてしないよう、正々堂々、ほしい人からのプレゼントを貰ってな！！」

『おー！！』

皆が声を上げる中、はやてさんは俺と目が合うと片目でウインク

をする。

……はやてさんには今度お礼をしないとな

――――――

音楽が止まり、皆が箱を開けていくと次々に異変に気付く。

「私のプレゼントシグナムと同じだわ」

「むっ……テスタロッサとも同じだな」

「うん、あっ、でも色が違うね」

「皆静粛にー」

慌てる皆をはやてさんが笑みを浮かべながら落ち着かせる。

「皆が受け取ったプレゼントは全部補佐君が用意したものや」

はやてさんがそう言うと皆の視線が俺に集まる。

……逃げ出したい

「六課が解散しても、皆が皆を忘れないように皆に同じプレゼントをあげたかった補佐君の心意気やで！」

軽く騒めくと直ぐに皆が言う。

「流石は補佐君、皆のことわ考えてるね」

「ちくしょー！なんであいつはこうも格好よく決めるんだよバカやろう！」

「はははは……彼をバカやろうだなんて……ヴァイスさん少し頭冷やそうか」

皆が皆何かを言う。

全てを聞き取れてはないけど――――

でも、嫌そうな顔をしている人は誰もいない

――――誰も

「成長したな」

俺の膝の上に座っていたヴィータさんが静かに言う。

「あの頃に比べたら、成長したよ、お前は」

「……そうですかね」

誉められて嬉しいな。

「皆落ち着いてなー今からクリスマスプレゼント交換を始めるで！！」

『おー！！！！！』

……六課に来てよかったかもな

いや、違うな

六課に来て正解だったな。

こんなにもいい人たちに囲まれて――――

――――幸せ……かな

――――いや、自信を持とう

――――幸せだ

――――

「クリスマスパーティーお疲れさま」

廊下で1人壁にもたれながら外を見ていた俺にフェイトさんは声を掛ける。

「お疲れさまでした」

彼女は俺の前に立つと窓から外を見る。

「雪振らないね」
「ホワイトクリスマス……でしたっけ？」
「うん、そうだよ」
心なし落ち込んでいる彼女に言う。
「そんな都合よく振りませんよ」
「だよね」
フェイトさんは短く言うと俺を見る。
「君のプレゼントは誰が貰ったの？」
「ティアナですよ。安物のネックレスをプレゼントしました」
喜んで貰えたようで何よりだ。
「君のプレゼントは……」
「なのはさんのプレゼントらしいですよ」
フェイトさんは俺が両手で胸に抱えている大きめのウサギのぬいぐるみを見ながら苦笑いを浮かべる。
このぬいぐるみをプレゼントされたときになのはさんに言われたのは

『私だと思って大事にしてね。
でも、ボロボロにしてもいいよ。
それも君の愛だもんね』

……だ

愛が重い

「成長したね」

溜め息を吐く俺にフェイトさんは言う。

「前のあなたなら、あんなプレゼント絶対買ってないよ」

……ストラップのことかな

「でも、変わらない」

……変わらない
そう、変わらないんだ

「前と同じ、あなたは皆とは少し離れて接してる」

人と人との距離感が掴めないから
だから、何時も俺は皆のことを少し離れて接してるんだ

「でもね、大丈夫だよ」

何がですか？

「あなたは私とだけ接していればいい」

そう言って手を差し出してくる彼女

――――そんな彼女が神秘的に見えて

――――それは、背後にある窓からの月光に照らされていたからかもしれないが

――――言葉に出来ないぐらい美しいと思えて

――――そんな彼女を綺麗と思えたのはやっぱり、そのセリフのせいなのかもしれなくて

「私はあなたのお嫁さんなんだから」

……そっか

俺は彼女の手を取る

「それじゃ、行こっか」

嬉々として話す彼女に相づちをうちながら、俺は彼女となのはさんの自室に向かう。

――――クリスマス

その日、俺はほんの少しの成長と

昔から変わらない自分を改めて理解した

――――特別な1日だった

聖夜なる1日（当日）（後書き）

湊「み、みなにぃのオールナイト物語出張番」

全員「……」

湊「何か言え！」

♪オープニングＢＧＭ♪

湊「転生者殺しの転生者主人公の鳴海湊だ」

龍牙「湊がみなにぃだなんて……」

ゴン「龍牙、余り笑ったら……」

了我「ゴン、そう言う君だって笑ってるじゃないか」

湊「黙れお前等！自己紹介をしろ！！」

銀「落ち着けって湊、魔法少女リリカルなのは×Ｓｉｌｖｅｒｅｙｅｓ主人公の銀だ」

ブレイド「魔法少女リリカルなのはｓｔｒｉｋｅｒｓ－剣一筋でイっとく？－主人公のブレイドです」

翔「魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄ～ｗｏｒｌｄ　Ｉｎｆｉｎｉｔｙ～主人公の相良翔だ」

了我「極限の息子主人公の笹川了我」

龍牙「タホと話したかったぜ……魔法少女リリカルなのは～『赤き修羅の力を持つ者』～主人公の真崎龍牙だ」

ゴン「タホの代わりとは言わないが今回は俺がきた病みつきなのはシリーズ主人公のゴンだ」

湊「そろって面倒な奴らだな」

了我「君もその面倒な奴らの一員だと思うがね」

湊「黙れ」

龍牙「そういや、ケーキはまだか？」

湊「ああ、ケーキならここにあるぞ」

ブレイド「ドーナツは無いんですか？」

湊「ミス〇に行け、ケフィアさんケーキのプレゼントありがとう」

全員「ありがとう」

翔「今回はタホの過去にも少し触れてたな」

銀「隊長補佐とヴィータの関係が気になるな」

ゴン「詳しい話は本編でやるらしいよ、次の1日のメインヒロインはヴィータさんらしいしね」

ブレイド「病みつき理由で明らかになるわけですか」

湊「おいおい、今回のはやては前にもまして活躍するな」

翔「関西弁に違和感ないか？」

ゴン「作者の技量不足だね」

龍牙「病みつきシリーズのはやては人気らしいな」

銀「アンケートで一位だったしな」

ブレイド「今後の活躍に期待ですね」

湊「あぁ、作者が関西弁を上手く書けるのに期待だ」

了我「やれやれ、期待できそうにないな」

湊「全くだ、それじゃ、みなにぃのオールナイト物語出張番、これにて終了だ」

ゴン「あっ、前書きに出た皆も来たみたいだよ」

隊長補佐「ちょうどいいタイミングみたいだったね」

湊「図ったようなタイミングだな」

アイギス「それじゃ、タホ、最後を綺麗に纏めるのよ！」

隊長補佐「わかりました、それでは皆さんいきますよ――――」

『メリークリスマス！！』

PS病みつきフェイト～聖夜談～投稿しました！

よかったら皆さん見てください。

それでは私からも皆さんに一言

メリークリスマス

懐かしむ1日（早朝）（前書き）

ピンチです！

詳しいことは後書きに！！

懐かしむ1日（早朝）

毎朝恒例のランニングのため待ち合わせ場所に向かったところ、そこに居たのはシグナムさんではなかった。

「おはようございます、ヴィータさん」

「ん、おはよう」

ジャージを着ているヴィータさんが俺の方を見る。

「今日はシグナムの代わりにあたしがランニングに付き合ってやるからな」

そう言うとヴィータさんは走りだした。

「早くしないとおいてくからな！」

「ちょ！　待ってくださいよ！！」

つーか、ヴィータさん速い！

シグナムさんは何時も俺に合わせてくれたのに、ヴィータさん全力だよ！？

……頑張るか

――――――

「ハァハァ……少し……休みませんか」

ヴィータさんと共に走ること数分、俺は息を切らしながら、ヴィータさんに休憩をお願いした。

「たく、昔から運動できないのは変わらないな」

少しはマシになったんだけどね。

「シグナムさんと走るようになってから少しはマシになったんですよ」

「別に鍛える必要はないだろ。
お前はあたしが守ってやるから、お前が無理して鍛える必要はない。
わかったか」

「……でも」

守られてばかりなのも迷惑だ。

「昔は口答えなんかしなかったのに、本当に変わっちまったよな。
前みたいにあたしの言うことを聞いてればいいんだよ。
あたしはお前の為を思って言ってるんだぞ。
昔から変わらない、あたしはお前のことを考えてるんだ。
そりゃ、はやての傍にいるのがあたし達の使命だけどよ……
でも、その使命よりも、あたしはお前が大切だと思ってるんだ！

あたしは……そ、それぐらいお前のことが大好きだからな！
だから、お前もあたしのことを好きでいろよ！」

……命令形ですか。

俺はヴィータさんからそう言われて嬉しく思う。
そして、それと同じぐらい自分が惨めに思えて
自分が最低な人間だと痛感する。

こんなことを言ってくれる女性がいるのに――――
その思いに応えることができない自分が――――

――――大嫌いだ

「なぁ、お前は覚えてるか」

何を……ですか？

「お前が昔言っていた『自分のお嫁さんになる人』の名前だよ」

「ッ！？」

それを聞いて、俺は俯くことしかできない。

「覚えて……無いです」

最低だよな、俺

昔、子供の戯れ言とはいえ、自分のお嫁さんになってくれるって

言ってくれた人の名前を忘れるなんて。

「……そうか」

ヴィータさんはどこか安心した顔をする。

「お前が気に病むことじゃない。
子供の頃の話なんだ、忘れててもしょうがねぇ。
それに、そんな約束相手が忘れてるかもしれねえだろ」

……忘れてる

そうだよな、相手だって忘れてるかも……

相手……誰なんだろ
やっぱり――――

「よし、休憩終わり」

「えっ！　もう！？」

「帰りは歩くぞ、それなら文句は無いだろ」

そう言ってヴィータさんは俺の手を取る。

「……ありがとうございます」

「それ止めろよ」

どれ？

「あたしとお前の仲なんだ、丁寧語なんて使わなくてもいい」

「……なら、そうする」

「さんも付けるなよ」

「わかったよ、ヴィータ」

……安心するよな

六課の中で『一番最初』に会ったのはヴィータだ。

俺の嫁になるって言ってくるた人がいた部隊から離れてすぐにヴィータに会ったんだ。

懐かしいな。

「なぁ、ヴィータ」

俺が呼ぶとヴィータは嬉しそうな笑みを浮かべながら此方を見る。

「ありがとう」

そう言うと、ヴィータの顔が少し赤くなる。

「な、なんだよ急に！！」

「ほら、前一緒に居たときは最後までお礼言えなかったからさ」

だから、ありがとう

「……別に礼なんか」

顔を真っ赤にしながら照れ隠しの言葉を口にするヴィータ。

そんなヴィータと談笑しながら、俺達は六課に向かってゆっくりと歩く。

――――――

な、なんなんだよ急に礼なんか言いやがって……

……本当に変わったよな

昔は表情1つ変えない無愛想な奴だったのに

それが、今じゃあんな笑顔でお礼を言うように……

やっぱ、あたしから離れた後も色々あったんだろうな。

――――複雑な気持ちだな

――――変わったあいつを見れて嬉しいような

――――最後まで面倒見れなくて悲しいような

でも、それでも言える

――――お前とまた会えて、最高にうれしいってことは言える

懐かしむ1日（早朝）（後書き）

こんにちはー勠bでーす

ピンチです！

リクエストがだいぶ減りました！！

マジでピンチ！！

というわけで、リクエスト募集です！！

常時受け付けてます！！！

PS新連載として

『バカとテストとフラスコ計画』

『病みつき語』

『原作キャラで作ったハーレムが修羅場な件について』

を投稿しました

修羅場な件については直ぐに消すかもwww

【重大】アンケート（前書き）

重大（笑）ではないです

［重大］アンケート

何時もの挨拶は省きます

今回のアンケートはわりと真面目なものです

［六課を本格的なヤンデレにしていいかどうか］

です

これは、以前から頂いていた『ヤンデレらしくない』『ヤンデレ……？』といった意見を貰うたびに思ってたことです

書いていいの？

原作キャラ同士で殺しあいしちゃうよ？

この作品を読んでる方は皆様原作好きな方だと思います

そんな方々が読んでるのにも関わらず原作キャラ同士で殺しあうのを書きたくなかったため、現状のようなやんわりとしたヤンデレを書いています

というわけで、アンケートは以下の通りです

1、ここから先の病みつき六課はキャラ崩壊させまくって本格的

なヤンデレにする

2、病みつき六課はこのままでいい

3、病みつき六課を完結させろ

4、それはまた別連載で書いてほし

以上になります

また、1になった場合は話を考えるため次の投稿に日が開くことをご了承ください。

さらには、皆様から頂いたアンケートも応えられなくなる可能性がございます。

2になったら何も変わらないです

3になったら病みつき六課を消します

4になったら新連載を近いうちにはじめます

PS、3にするなよ！　振りじゃないぞ（チラッチラッ

連載宣伝（前書き）

アンケートに協力してくれた皆さんありがとうございます！！

連載宣伝

“思いにから逃げる人間は最低だ。　だから俺は最低な人間なんだ”

彼女達が病みつきにるほど愛す少年“隊長補佐”

そんな隊長補佐は昔の約束を果たす

だがそれにより隊長補佐の世界は壊れていった

“片思いの愛に応えるには、それなりの覚悟とそれなりの自覚がいる。　俺にはそれがなかったのかもな”

これぞまさに現代の

［狂気］［狂気］［狂気］

１００％リア充爆発を願って書いてく連載です

隊長補佐「最後で台無しだよ！！」

○物語は名作だと思っている

隊長補佐「アンケートを見てたら、『本格的なヤンデレを見たい』という方がちらほらいたため新連載として書き始めました」

タイトルは『彼女達を壊した俺の罪語』です

隊長補佐「皆さん見てください」

それじゃ隊長補佐、最後の一言

隊長補佐「『壊れゆく、世界を描く罪語り』」

ＰＳアンケートは集計してませんが、２がだんとつでした

３が余り無かったのに驚きです

連載宣伝（後書き）

現在オリジナルヤンデレ短編執筆中です

何時も見たく序盤を希望する方に送るかどうか悩んでいます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6912w/

病みつき六課

2012年1月6日23時46分発行